
IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 何回か転生（？）する人の物語

【Nコード】

N7031Y

【作者名】

起源はきつと厨二病の人

【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た！そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残ってみせる！！」と頑張る物語

ブローグ的な（前書き）

はじめまして起源はきつと厨二病の人です

この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなってしまいましたが暖かい目で見守ってください
るとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんなの〇〇じゃないなど
といったものがあると思いますですがそれが嫌な人は戻ることをお勧め
いたします（汗

それでもよければぜひともご覧ください

ブローグ的な

皆はよくネットで見るような二次創作のように自分が転生や憑依、トリップをしてみたいと思ったことはあるだろうか？

俺もうらやましいと思っていたが・・・まさか、何処にでもいそうな一般ピーポーの自分が経験するとは思ひもしなかった、、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わリ自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してP S 3を起動し、A C f aを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

くそして現在く

ここに来て（？）から建物内をちよつと調べているとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかった。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

（それにしてもさつきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・？）

などと思っれていても実際に体に怪我などをしているわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような・・・」

とぼそりとつぶやいた瞬間、ふと勘づき急いで近くのトイレに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

「なんじゃこりゃあああああああああ！！」

（なぜ今まで気づかなかった！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

A C f a を始める↓リリウムたんマジ可愛いよ↓テレビからなぞの光が！↓知らない天井だ↓俺、若返りました↑今ここ

「面倒なことになった・・・」

「悩んでいても仕方ないな、建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前にきた横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィックがある

（なんだ、これは？

映画によく出てくるような手を触れてやるやつかな？

試しに触ってみるか）

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLETEという文字が浮かびどでかい扉が重たい音を立てながら開いた

（なんか開いちゃったよ！）

そしておそろおそろ入っていくとそこにあつたのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものすごく見覚えがあるんだが、まさかな・・・」

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPSS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそう言つとため息をつき、呟いた

「面倒なことになった・・・」

ブローグ的な（後書き）

最初から駄文ですいません……

これから頑張っていきたいのでよろしくお願いします

第1話（前書き）

すいません今回も駄文です；；；

戦闘の描写が下手だったりしてわかりにくいかもしれませんが許してください（汗

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれませんがそこら辺はご了承ください

第1話

第1話

俺はとりあえずあのAC中に乗ってみることにした

そして不思議なことに身体が覚えているように次々とコクピット内を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とこのACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ

ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ

要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたらしい

なんともまあ良くできたご都合主義なことだ

そう思っているとコクピット内からpipipiと音がする音を聞いたほうをみるとそこには携帯端末らしきものがおいてあり画面には依頼主と書いてあった

(マジかよ・・・)

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思ったのだ

この世界に来たということは戦場にたつかもしれないということ、すなわち死と隣りあわせということである

そう思うと携帯端末にを取ろうとしている自分の手が急に重くなったのだ

実際はその手に何か重いものが乗ったわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さっきAC内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこつちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといっても人殺しは人殺しだ戦場だったからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足掻くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のほうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやっと決心して携帯端末を手取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？随分と遅いんじゃないか、死んじまったかと思っただけだ
ガハハ」と相手の男は笑いながら言った

「すまない、少し仮眠をとっていたものでな」

「おいどうした？いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいなんかなかったのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かったただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかったが」

「ああ、気づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、そうだったそうだった」

と男はまるで今思い出したかのように笑った言った

（どうやらこの電話の男とこっちの俺は知りあいようだな）

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつもどおりのマールに2時間後に来てくれ」

「わかった2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切ったのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあらゆるデータを見ることにした

そして2時間後

彼はマールという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせっていたが携帯端末内に地図もあり看板もでかいためすぐに見つけることができた

（それにしても色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争の最初のほうみたいだな

まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだしな）

そう思っているとこちらに向かってくる身長が2メートルぐらいありそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさっきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言ってきた
「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそらく携帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容を見た

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰すことであつた

（大企業の兵器開発工場ということはネクストG Aあたりのネクストを作っているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともいえないが）

レイジがそう考えていると

「どうした？何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安でな

敵の新兵器でも出てくるんじゃないかと思っただけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだがゴジマなんちゃらを動力源として動かすACを作っているみたいだ」

「っ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？できたらすぐにお陀仏じゃないか！）

「その新兵器に対しての情報はるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7／8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ」

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい」

「あとほかに不明な点はあるか？」

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらっ」

そっとうとレイジは席を立ち帰ろうとすると男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

とニカツと笑う男に対して自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

というレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家(?)に帰ってきたレイジはすぐさまACのシュミレーターを使い必死に訓練していた

(やはりこの体が本能的に覚えているらしいな・・・)

それにしてもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こうの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・)

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に N I O H 左腕武装に W L O 2 R - S P E C T E R というなんとも微妙なアセンである

(昔の俺は何をしたかったのだろうな・・・)

と内心ため息をつきながらもしっかりとシュミレーターで訓練をしているのであった

あれから数日がすぎ依頼当日

（これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・）

レイジはもう一度依頼内容をしっかりと確認して心を落ち着かせようとしていた

（もうすぐ時間だな・・・）

と思うとコクピットの通信からあの男の声がした

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブーストをふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなっている

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなのが最強の兵器を作ったって宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もつといい素材を渡してほしいもんだ」

と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中中のグレネードを打ち次々に建物の主要施設である場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したところにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWL02R-SPEC T E R をMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まできて扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあった

（後はこいつを破壊すれば終わりか・・・）

と心の中で呟き右腕武装のNIOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

（これで終わりか・・・）

そう思うとレイジは壊滅状態になった工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえってその中には必死に助けてや死にたくないなどと言うものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであったそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた（俺が殺した・・・この手で俺が）

そう思っていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かって銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があった

レイジはとっさに殺されると思い左腕武装のWL02R-SPEC T E R でひたすらに相手を撃った

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」

そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにしていたそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残っておりあの地獄絵図を思い出してしまい急に胃の中のがこみ上げてきて嘔吐してしまった

（これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・)

“ 死 ”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった

第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいますがお許しを
そついや主人公設定など書いたほうがいいですかね？

第2話（前書き）

頑張って投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文；；

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（D；）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突っ込まないでください（汗
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を
出してみましたか・・・なんというか

第2話

第2話

あの初（？）の依頼から一週間ぐらいすぎた頃に携帯端末が鳴り響いた

（また、依頼か）

そう思うとレイジは携帯端末を手に取った

「依頼か？」

「ああ、なんと今回は僚機をやとったぞ」

「僚機？」

「ああ伝説のレイヴンだそうだ」

（伝説のレイヴン？まさかLRの主人公か？）

「わかった、依頼内容の受け取りはいつもの場所か？」

「いやすまんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらにメールとして送らせてもらう」

「そうか、珍しいななんかあったのか？」

「いや、いろんな依頼を整理していてなちょっと忙しいだけだ」

「ならいい、無理はするなよ」

「・・・」

「ん？どうした」

「・・・つああ、お前さんこそ珍しいなと思ってな、いつもは心配すらないのに」

「なに、ただの気まぐれさ」

「では後ほど依頼内容を送らせて貰う」

「ああ、頼んだ」

そういうとレイジは携帯端末の通信を切った

依頼主の男side

「ああ、頼んだ」

という言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は

「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末からpipipiと鳴るとレイジは端末を手に取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

（スウェーデンというと北欧のあたりか？）

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見える

（なるほどどうやら情報を見る限りLRの主人公みいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行って合流するでしょう）

そう思うとレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた
そして自分の僚機になる者に合流をしにいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかったとしても顔を知っておくぐらいはしようと思ったのだ、そして俺がこちらの喫茶店の奥のほうに座って待っていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座っている奥のテーブルの前に行くところだがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

（この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか？）

そう思っていると青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな？」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそっけなく返されたレイジは内心焦ったのだ

（まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな？

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまったかな？）

とレイジが焦っているとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒っているような印象を持たせるとよく言われていたの思い出し

(いつもの悪い癖が出てしまったか・・・)

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを他人に触れてほしくないよな気に障ったようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは

「いや、そのことは気にしていない」

こちらこそなんか怒っているみたいなの印象を与えてしまったようだ
すまない」

とあわてて返してきたのだ。そして二人は互いのその光景に面をく
らい思わず笑ってしまった

「おっとすまないそういえば俺の自己紹介をしていなかったな、依頼内容のところで知ってると思うが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイヴンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会ってから二日後、作戦開日

「こちらレイジ作戦開始時間となった、戦闘を開始する」

「こちらレイヴン、了解したこちら也开始する」

そう通信するとレイジはブースターで移動をし始めた

（二回目の戦闘だって言うのに前回より心が断然なれてるな、一回でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな）

と思っていると目的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かって背中中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思った瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思いあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

（なっ！まさかネクストだと！？どうしてこんなところに！？）

と思っていると通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまん、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち目はまったく無いと思ってお前らの情報売って安全を保障することにしてもらったんだ」

彼は淡々と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになっているからな、まあ運が悪かったと思ってあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言うと通信は切れて目の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だったなあ、時代遅れの鴉どもめ。このエリートが葬ってやるよ喜べえ！」

ハハハと気がふれてるように笑って言った

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送った

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあれは？」

アイマードコア・ネクスト

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」

「それは本当か？これからどうするんだ？」

「二手に分かれて逃げよう、近くに洞窟があるその付近でACを乗り捨てて逃げるんだ。」

いくらネクストでもそこに入り込まれたら探し出すことはほぼ不可能だ、一緒に逃げてもまとめて殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け」

「そんなことしたらお前がただじゃすまないだろ！？しかも相手は三体いるだろ！」

「まかせろレイヴンが逃げる時間ぐらい稼げるさ、俺のほうがお前よりネクストのことを知っている」

そう言ってもレイヴンは一向に自分だけが生き残ることを選択しようとしないうといたするとレイジは

「いいから早く行け！！お前はこんなところで無様に死ぬのか！？違うだろ？お前は誇り高きレイヴンだろ！なら生きてレイヴンは誇れる存在だと、俺たちのためにも生きてくれ！！」
それを聞くとレイヴンは

「すまない」

とつぶやきオーバーボードスーツをふかし去っていくのを見て

敵ネクスト、赤色のアリーのパイロットは

「おい！なに逃げようとしてんだよ！？」

というと右手に持っている04-MARVEをレイヴンのACに向けて発砲しようとした瞬間に鈍い発射音と共に横からグレネードが

打ち込まれた

「ああ！？てめえなにしゃがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした

「ふっ、エリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言う

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ屑が！！おいベルリーズ、アンジエてめえらはこいつとさっき逃げた奴には手を出すなよ！俺が始末してやるっ」

と言うと二人からは「好きにしろ」との言葉が返ってきた

（これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？）

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！」

その言葉と同時に04・MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃げた

「おい！さっきの威勢はどうした？逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対してレイジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとはくだらないな、レーザーソーでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言ったことを後悔するなよ？お前のACの四肢を切って最後にじっくりコアを焼ききってやるよ！！」

そついうと彼は右手から04・MARVEをすてて左手の02・D RAGONS LAYERだけとなった

（下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？それともAMS適正で頭のネジが吹っ飛んだか？どちらにしてもこちらにチャンスはできたわけだ）

そう思うとレイジは右背のグレネードをパージして相手の目の前に
でた

「やっと観念したか屑野郎めが」

そっぴいこちらに向かつて突っ込んでくる赤いアリーヤそれに向か
い左背のグレネードを下半身に撃ち込む

するとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにP A フライバルアーマーなどがあっても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に
硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージ
オーバードフーストしてOBをふかし相手に向かつて突っ込む

すると敵も一時的な硬直が終わり再び左手の02 - DRAGONS
LAYERを振るった

だが02 - DRAGONS LAYERが直撃することは無かった、
なぜならば02 - DRAGONS LAYERはほかのレーザーブレ
ードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握でき
てない三流リンクスが振るったところで一撃必殺にはならなかった。
だがレイジの乗るACの頭部に掠ってしまい頭部が吹き飛んだがレ
イジはとまらずに

「おおおおおおおおおおお!!」

と叫び相手のアリーヤのコアに右腕部のNIOHを撃ち込むと

「ガアアああアアああアああ!!」

と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しん
でいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにNIOHを3回撃ち込むと
赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

（これでもう戦ったための武装は無いな、だがレイヴンが逃げるこ

ができるぐらいの時間は稼げただろう」

そう思うとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももうレイヴンの時間稼ぎをまだ行つかのように立っていた

それをみたベルリオースは

「なるほど、そんなになつてまで仲間を助けようとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな
なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いいや、死ぬのは怖いさ、そしてなんもなく無意味に死んでいく
のはもっと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていないの
とあまり変わらないと俺は思っている」

と今にも気を失いそうな自分の体に鞭を打ちそうこたえた。すると
アンジエが

「ならばなぜ今このときも逃げようとしない？充分にあのACが逃
げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと
思っただけさ」

その後、まあ生きることが勝利なら俺はもう負け確定だけどな
と加えて言った

それを聞いたベルリオースは

「ほう、いい戦士だ。お前にもう一度チャンスをやろう」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからずに自分の意識を手放
したのであった

第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジエ、4の主人公はこんなじゃねえ！
と思われるかも知れませんがそこら辺はつつこまないでくれるとあ
りがたいです（・・・）

そして次も頑張りたいと思います

第3話（前書き）

えゝ前回の話でネクストに勝ってますがそこら辺はご都合主義という形で保管してもらえとうれしいです（汗

そして今回も微妙なですけど是非読んでください

第3話

第3話

「知らない天井だ・・・」

と言うと最初に目に入ったのは白い天井である

（俺はあの後、死んだのか？）

そう思っていると病院で嗅ぐ様な薬品の臭いが鼻を通ってきて、ぼやけた意識を覚醒させていく

（ここは天国じゃないと病院か？）

そう考えると体を起こし周りをみると自分の体に点滴やら医療用のチューブなどが繋がっているのを見る

（まさか気を失っている間に“ナニカサレタヨウダ”ってことになったのか！？）

などと考えていると見知らぬ男が入ってきた

「どうやらやっと目が覚めたらしいな」

と聞き覚えのある声

「あんたはまさかあの新型ACに乗っていた人か？」

（もし、そうならこいつの名は

「そうだ、私の名は

“ベルリオース”

だ。おぼえておいてくれ」

「ああ、それよりどうして俺は助けられたんだ？」

「ふむ、興味がわいたと言ったほうがいいのか？」

「興味がわいただけで助けるのか？まあ、助けてくれたことには感謝する。それとあのとき最後になんか言ってたがどういう意味だ？」

「言葉のとおりだ。お前にもう一度チャンスをやる、自分が生きた証を立てることができる、すなわち、もう一度戦場に立つチャンスをやると言っただ。」

「あんたはなぜそこまでしてくれるんだ？それこそあんたが言っていたように他人からみて無意味な行為など言われんじゃないのか？」
「そうかもしれないな。まあ個人的にだが、よい戦士だと思ってな、見てみたくなっただのさ」

なにをとは言わなかったがそれはレイジもなんとなく“それ”を理解したのだ

「そうか、そういえば外の状況はどうなっているんだ？」

「ああ、それな」それならすでに企業側が圧倒的な勝利を収めて終わった」

とベルリオーズの言葉を扉から入ってきた女性がさえぎり、口にした。するとレイジは

「あの後、たった一日でか！？」

（いくらネクストが圧倒的に優れているといえ一日ですべてを潰したのか！？）

と驚愕の表情をし聞いてくると

「一日？なにを言ってるんだ？すでに一週間と数日はたっているぞ。」

と呆れたように答える女性

「俺は一週間以上も眠ってたのか！？」

とまたも驚愕の表情で聞いてくるレイジ。それを聞くと女性は

「まったくいちいちうるさい奴だ、いいかよく聞け、お前は私たちと戦った後なぜか知らんがそこにいるベルリオーズに助けてもらいこの療養施設に運ばれて、お前が眠っている間に企業側が圧倒的な勝利を収めて戦争は終わった。そして今日お前が目覚めたというわけだ。まったくなんでこんな奴を助けたんだ・・・」

と呆れたように肩をすくめて言う女性の言葉に対してベルリオーズは「よい戦士だと思っつてな、興味がわいたんだ。そういう君もまっ

たく興味がないわけではないだろう？」

そう言われると女性性は「ふん」と言いそっぽを向いてしまった

「そついえば彼女の名を言っただけでなかったな、彼女は「アンジェだ」・

・それとまだ、お前の名前を聞いていなかったな」

「ああ、言っただけを忘れていてすまない、俺の名はレイジだ。もう一度言わせて貰うが助けてくれたこと、感謝する」

と言うとレイジは軽く頭を下げた

「なに、あまり気にするな。そしてさっきお前にチャンスをやると言っただけについてだが、AMSを移植してもらった方がいいな？」

と聞くとレイジは

「どのみちそうでもしなきゃこの先、戦場では生きていけないんだろ？移植するなら今からでも俺はかまわん」

と笑って返した

「理解が早くて助かる。ならば私についてきてくれ」

と言うとベルリオーズが部屋を出て行き、レイジはそのあとについていった

あれから俺はAMS移植手術をして数ヶ月後、はれてリンクスとなっていた

そしてレイジは助けてもらった恩を返すために2年程レイレナー社のリンクスとして動くことになった

因みにレイジのAMS適正は下の上、良く言えば中の下という微妙なものである

（どうやら神様は俺に厳しいらしいな・・・ん？でも確か、AC4の主人公のAMS適正は最悪だったよな、ならうじうじ文句は言ってられないか）

と思い今日もまたシュミレーターでネクストを動かし、少し休憩している

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」とアンジエが言ってきたのだ

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と自嘲気味に返した

「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

「そうだな、よろしく頼むよ」

そう言い再びシュミレーターに乗り込んだ

アンジエ side

彼女は今日、珍しく、数ヶ月前に新しくリンクスになったレイジのシュミレーターの成績を見ている

正直、彼は彼女が思っているよりも成長の度合いが早かった。

（あいつのAMS適正は下の上であり低いほうだったな、なのにこれだけの成長速度・・・いや、むしろ速すぎるぐらいか）

と思っているとレイジがシュミレーターからでてきて近くのいすに座った

（ふむ、試してみるか・・・）

そう思い彼が座っているほうに歩いていき

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」と言うレイジは

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と付け加えて自嘲気味に返してきた「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

と彼女はシュミレーターに指をさしながらレイジに言う

「そうだな、よろしく頼むよ」

と言いは再びシュミレーターのほうに歩き出し乗り込んだ。それを見て彼女は

(ふっ、これまでの力、試させる手もらっぞ)

と思いもう一台のシュミレーターのほうに歩き始めた

side out

シュミレーター内の仮想空間の戦場

そこにはアンジェが乗るネクスト・オルレアとレイジが乗るネクスト・アノーニモがいる

オレルアの武装は左腕武装に01 - HITMAN 右背武装にSULTAN 肩に09 - FLICKER そしてなによりも彼女の代名詞と言っているほどの特徴のある右腕武装“07 - MOONLIGHT”である彼女の振るう剣は誰よりも美しく、勇ましいものであり剣姫と言う名がふさわしく思えるものである

それに対してアノーニモの武装は右腕武装に03 - MOTORCOBRA 左腕武装に04 - MARVE 左背武装にTRESOR
というなんとも特徴の無いアセンになっている

そして二人のコクピットに開始の合図がでる

すると先に仕掛けたのはアンジェの乗るオルレアである

真っ先に肩の09 - FLICKERを撃つと同時に07 - MOONLIGHTで切りかかってくる

レイジはとつさに左にQBでよけるが07 - MOONLIGHTが
少しかすりPAをこつそりと削られる

そしてレイジはすかさずQBを使い多少距離をとるとQTで体勢を

立て直し左手の04 - MARVEをまだこちらに向ききっていない
アンジエに対して（もらった！）そう思い撃つ

しかしその行動を予めよんでいたかのようにQBで難なく避けたのだ
だがレイジもすぐさまにQBを使い、アンジエに張り付くように移動し、右手の03 - MOTORCOBRAと左手の04 - MARVEを撃つ

それに対してアンジエも左手の01 - HITMANで撃ち返しながら
右手の07 - MOONLIGHTで切り裂こうとどんどん近づいてくる

レイジも相手の必殺の間合いに入らぬようにQBを使い均衡を保っていた

しかしすぐさまその均衡をやぶったのはアンジエであった、アンジエはレイジの一瞬の隙をみて二段QBで一気に詰め寄り右手の07 - MOONLIGHTを振るった・・・が完全には切り裂いていなかった
レイジの突発的な二連QBでなんとか致命傷を避けたのだ
（ほう、今のは完全に決まったとおもったんだがな、にしてもなかなか当ててくるじゃないか。なら次は強引にいかせてもらおう！）

そう思いながらアンジエは攻撃の手を休めずにいた。そしてレイジは（危なかった、何とか致命傷にはならなかったがAPとPAをこつアーマーポイントそり持つてかれたな、にしてもさっきから攻撃がどんどん鋭くなっているな・・・しかたないここは賭けに出るか）

と考え左手の武器を背中のTRESSORに切り替えアンジエに向かいQBをすると

アンジエは好機と考えレイジに向かい07 - MOONLIGHTで切りかかった

するとレイジは07 - MOONLIGHTがあたる直前でTRESSORを撃つと同時に右にQBをしたが避けきれず07 - MOONLIGHTがほぼ直撃してしまったのだ、するとアノ二モのAPは0となりLOSEと言う文字がレイジのシュミレーターに浮かび上がった

（やっぱりかー！）

と思いレイジはシュミレーターをでた

アンジエ side

（最後のあいつの一発もし直撃していたら私は負けていたかもな。
強いな・・・この先が楽しみだ）

と心の中で言うと彼女は自分でも気づかぬうちに笑っていた

（やはりベルリオーズの見込んだとおりかもな、よい戦士になりそう
うだ）

そう思いシュミレーターからでた

side out

アンジエがシュミレーターからでるとレイジは

「やっぱりアンジエは強いな、勝てんな」

「ふっ、お前も予想より強くなっただじゃないか」
と珍しくレイジのことを褒めたのだ

「そうか、ありがとう。だが次は勝てるようになってやるさ」

「よく言う、簡単には勝たせやしないさ」

そう言うアンジエはシュミレータールームを去っていく
そして扉をでると

「君が褒めるなんて珍しいな。いいことでもあったのか？」

と聞くベルリオーズに対して

「そうか？まあ、あいつはお前の言ったとおり、よい戦士になるかも
な」

そう言うとな彼女は廊下を歩いていった
するとベルリオースは彼女の言葉に対して「ほう」と言うとシュミ
レータールームに入っていた

そしてこのあとレイジはリンクスNo.29をもらい
シュミレーターでベルリオースにぼこぼこにされるのであった

第3話（後書き）

相変わらずベルリオーズやアンジェはこんなじゃねえ！と思われ
ますよね・・・orz

あとリンクスNo.29ですが実際はAC4開始前に倒されている
らしいんですがそこら辺は少し独自設定的なものを入れさせてもら
いました

次も頑張つて書きたいと思います

早く時間を進めたい・・・

第4話（前書き）

えゝ、今回も無駄に長いし駄文です

いろいろとキャラが安定してなく読みづらいと思いますが、すみません（汗

そして、IS出てこないやん！と思われる方もいらっしゃると思いますが

ISの世界に転生するのはもう少し先になりました

一応今週中にはISの世界にいくつもりでありますのでどうか温かい目で見守ってくださいm（―――）m

第4話

第4話

レイジ side

「リンクス、お疲れ様です。そちらに輸送用のトレーラーを回しますので、それに乗り帰還してください」

「言いオペレーターからの通信が切れるとPAをきり、肩の力を抜くと今までのことを少し思い出していた」

昔は戦場なんてものはアニメや漫画、ゲームでしかありえないと思っていたのに自分が今この場にいること馴染んできているのが非常に不思議に感じる。今でも夢を見ているんじゃないかと思うくらいだ、最初のミッションであの地獄絵図を見たときガタガタ震えて嘔吐をしてしまっていたのに今ではその地獄絵図の状態で敵の兵士などが命乞いをしても躊躇わずに引き金を引けるほどまでに自身の心は変わってしまったていると考えると複雑な気持ちになる。

アニメや漫画、ゲームの戦争の殆どは主人公達がいてその主人公達と敵対するものがほぼ必ずと言っていいほど世界を混乱に陥れるためにだの言い主人公達のほうに必ず大義名分があるようになっており、しかも事情があったり、悪に利用されて戦っている人達や事情を知った主人公達はその人達を殺さないで事情を解決したり悪を倒してハッピーエンドとなるようになっていく。

だが実際の戦場と言うものはそんなものではない。戦うものにはそれぞれの思惑があり片方が絶対的な悪というのは存在しないのである。

る。誰かが正義と知っていることは他の誰かからみれば悪になるかもしれないのだ。そして戦場^{いくさ}では一瞬でも引き金を引くことを躊躇えばその先に待つのは“死”というものだ。例え相手が家族を人質にとられて戦うしかないとしてもだ。そういう悲劇的な相手に対しても命を奪う非常さがなければ生きていくことは難しいのだ。

そう考えている間に遠くに輸送用のトレーラーが見えてきてレイジは考えることをやめて帰還の準備をした。

s i d e o u t

そしてレイジは輸送用トレーラーで近くのコロニーに帰ってきて町を歩いていると大きな荷物を必死に持っている少女がいた、見ていると今にも転びそうでもとも危なっかしい様子である。

（ふむ、手伝ってやるべきか？だがいきなり見ず知らずの他人が手助けしようとしても、不審者にしか見られないからなあ）

そう考えていると少女がとうとう転んでしまい中にあるものをばら撒けてしまい近くにいた軍隊のような服装をした男達3人ほどの集団に当たってしまったのだ。

すると少女は

「ご、ごめんなさい！」

と慌てて誤る。しかし男は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と因縁をつけてきたのだ。だが少女は必死に謝ることしかできない

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！
ともう一度謝るが

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

と、さらに怒鳴りつける

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけ許してもらえと思ってんのか？」

と他の男が言いそれに続きさっきの男が

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

そうは言っても子供が10万などという大金を持っているはずがなく払えるはずがないのだ。しかし男達は無理に要求してくる

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに催促してくる

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」

なみだ目になりながらも必死に訴えてる少女。

「へえ〜」

と言いながらその少女をなめまわすように見ると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話しないとね」

と言うと強引に少女の手を引き路地裏の暗いほうへ連れて行くところ。少女は助けを周りに求めるが通行人は見てみぬふりであるまあ軍人みたいな相手だと自分の身がかわいくて誰も助けることはしないだろう

（なんつつか、アニメや漫画でありそうな光景を目の当たりにするとは思わなかったが、まあ俺も流石に子供を見てみぬふりをするほど腐っちゃいないからな、全く面倒なことになった・・・）
そう言うとも男達がいるほうへ歩いていった

今日は、おつかいに来ました。そして今日のおつかいはいつもより荷物がいっぱいでも大変です。だけどほかの子のみんなのためにいっしょうけんめい運んでいます。するとつまづいてしまい途中で転んでしまいました、やっぱり一人で来ないでお姉ちゃんに手伝ってもらえばよかったなと少し後悔しました。

わたしは急いで散らばった荷物を拾おうとしました、すると男の人たちがこちらをにらんでいます。わたしはおそろおそろ男の人たちを見ましたすると荷物の中にあつたジャムが男の人たちの中の一歩背が高い人の靴にかかってしまっているのを見てあわてて

「ご、ごめんなさい！」

と急いで謝ります、ですが男の人は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちまったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と怒鳴られてしまいました。わたしは必死に謝ります

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！」
ですが男の人は

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

とさらに怒鳴りつけてきます。すると

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけで許してもらええると思ってるのか？」

と二番目に背が高い男の人が言ってきました。どうしよう、偉い人なのにと必死に考えてると

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

とさっきの男の人から弁償をしろと言われます。そんなこと言われなくてもそんな大金は持っていないです。ですが男の人は

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに言ってきました。ですがわたしは孤児でたとえ孤児院に帰ってもらってくることもなくてできません

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」
と、わたしは泣きそうになるのを必死にこらえ言いましたすると男の人は

「へえ」

と言うと私のことを気持ち悪い目でじつと見てきます。すると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話しないかね」

と言うとわたしの腕をつかみどこかに連れて行くこうとしてきます。

わたしは必死に抵抗しましたが大人の力には勝てず、どんどん引きずられていきます。わたしは必死に周りの人に助けを求めますが周りの人たちはみんなこちらをチラツとみるとすぐにどこかに行ってしまう。わたしを助けてくれる人が誰もいないのだと、そう思うと今まで抵抗してた自分の力がゆるみもう駄目だなと思うと

「おい、下衆どもその手をさつさと放してとつと消えうせろ」

と黒い髪に黒いコートを羽織った男の人が言いました。するとわたしをつかんでいた男の人が

「なんだ、てめえ？お前は関係ないだろすつこんでろ！」

と怒鳴りました。すると黒い男の人は

「さっきの会話からするにたかが10万払えばいいのだろう？」

と言うと財布のなかからお金をわたしをつかんでいる男の人にむかって放り投げました。すると

「さっき払えなかったから利子がついて合計100万払えば許してやるよ！なんせ俺は偉いからなあ！」

と笑いながら無茶な要求をしてきました。すると黒い男の人が

「そうか、貴様は自分が偉いとか思ってるのか？やれやれ、とうとう脳みそまでも力ビたか・・・」

と言うとわたしをつかんでいた男の人が急に黒い人に向かって殴りかかりました。わたしは思わず目をつぶってしまい。鈍い音がしておそろおそろ目を開けると殴りかかった男の人がおなかの辺りを必死に押さえてうずくまっています。すると二番目に背の高い人が

「おい、てめえこの人はリンクスだぞ！てえだしてただですむと思
つてんのか？」

わたしは、それを聞いて、とてもあせりました。リンクスという人
は戦場で戦うとても強い人だと聞いたことがあります。そんな人に
手を出して大丈夫なんでしょうか・・・

「ほう、そいつはリンクスカ、笑わせる。俺もリンクスだがそいつ
のような奴は見たことが無いんだがな、因みに俺のリンクスNo.
は29なんだがな」

そう言うのと二番目に背の高い人は顔を真っ青にして

「ほ、本物のリンクス」

と言うとうずくまってる男の人ともう一人の男の人と一緒に急いで
遠くに行ってしまった。そして黒い人はこちらのほうを向くと
近づいてきました。そして黒い人はわたしの頭に手をのせると

「大丈夫か？よく我慢したな」

と言いました。するとわたしは急に涙がでてきて泣いてしまいました
ず黒い人に抱きつき声を上げて泣いてしまいました。すると黒い人は
「もう怖くないから安心しろ」

と言いわたしをそつと抱きしめてくれました。黒い人は外見は真っ
黒だけど絵本に出てくるような白馬の王子様のようにみえました。

s i d e o u t

あのと少女は多少落ち着いたらしく泣き止んだ

「どうだ？もう大丈夫か？」

「は、はい。その、さっきは助けてありがとうございます！」

「なに、気にするな。そっぴゃお譲ちゃん、買い物をしてたみたいだが大丈夫か？」

「あ！どうしよう・・・」と言うと少女は俯き肩を沈める

「ふむ、買うものはまだ憶えてるか？」

突然の発言に少女はビクリし

「ふえっ？」と素っ頓狂な声を発してしまった。そして

「はい、一応憶えています・・・」そう答えると

「そっか、これも何かの縁だしな。俺が代わりに買ってやるよ」

「で、でも助けてもらったうえにそこまでしてもらうのは・・・」

と、ためらう少女

「だけどまた親御さんにお金をもらいにいくのも大変じゃないか？」

「あ、えっと、その、わたし孤児院に住んでいて、親がいないんです・・・」

と少女はだんだんと声を小さくしながら言っつのを聞くと

（やってしまった・・・あまりにもデリカシーの無いことをしてしまった・・・）

そう思い、レイジはどうにかしようと考え

「じゃあ、俺が君の住んでいる孤児院にお金を寄付するということでもいいね」と言うが

「で、でもそれは、」とまだ言おうとするのに対して少女の頬を軽く引つ張り言葉をさえぎると

「まあ、いきなりあつた見ず知らずの人を信用しろと言うのなんだが、もうちよつと年上の人を頼つていいんじゃないか？」

と優しく語り掛けると少女は小さく　こくんと頷くとレイジは頬から手を放し

「やはり、子供は素直が一番だ」と言い笑った。すると少女は手に軽く力をいれ

「あ、あの！わたしは、リ、リリウムといいます！お、お兄さんの名前を教えてください！」と力強く聞いてきた

「そっぴゃ、言っつてなかったな。俺はレイジ・クゼだ、よろしくな」

そう言つと席を立ちリリウムという少女と買い物をしにでかけた

そして買い物途中

「そういえば、レイジさん、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、全然問題ないな。リンクスは高給取りだからな」

「リンクスですか、その、怖くないんですか？戦うことが・・・」

「怖いといえば怖いかな・・・けど、もう慣れてきてしまったかな？それに、もうこれしか生き方が無いからな」

「で、でも他のお仕事だって頑張ればみつけれらんじゃ」

「まあ、できないことも無いだろうが、戦うことしかしてきてないからな、他の仕事につくのは難しいだろうな」

（レイジさん、なんかとても寂しそうな目をしてる）とリリウムが思っている

「ほら、こんなくらい話はやめよう！子供には関係ない話だ。」

と言いいりりウムの頭をわしゃわしゃとなで「ふむ、綺麗な髪の毛しているな」と言う

「孤児院のお姉ちゃんがいつも丁寧にとかしたりしてくれるんです！」と嬉しげに話す。するとリリウムはふと足を止めとある商品棚に置いてある百合の花の髪留めを見ていた。それを見てレイジは

「どうした、それが欲しいのか？」と聞くと

「い、いや、とても、綺麗だなと思って」

「ん？欲しくないのか？」

「そ、それは・・・ほ、欲しいですけど・・・」とごによごによと答えるリリウム

「よし、俺からのプレゼントだ、買ってやる」

「い、いえ大丈夫です！そこまでしてもらうのは」といいつつもやはり欲しそうに少し目を輝かせている

「遠慮するな、リリウムも女の子だ小さいころから髪留めの一つや二つみにつけないと将来もてないぞ」

といい髪留めを買いリリウムに渡すと、とても満面の笑みだった。

そして残りの買い物も無事に終わりリリウムを孤児院に送っていくと去り際に「縁があつたらまた会おう」と言いレイジも帰ることにした

そしてそれから数ヶ月後レイレナード社にレイジは来ていた

（ベルリオーズと呼ばれたが、どうしたんだ？二年間だけといったがそのあとも一応、レイレナードのリンクスとしているからな・・・）

と考えているとレイジが待っていた部屋の扉が開きベルリオーズが入ってきた、すると・・・

「世界を私たちとともに変えないか？」

第4話（後書き）

今回もびみようでした・・・

そしてリリウム登場させてみましたが、正直、無くてもいいんじゃない？って感じですが作者があまりにもリリウムたんと、きやつきやつ、うふふって感じのを書きたいがため頭の中の妄想を垂れ流しました（D、；；；

そして次から一気に時間を進めていきどうにか今週中にはISの世界にいけるよう努力いたしますのでよろしくお願いしますm（
| ;) m

第5話（前書き）

え、いつの間にか5000PVと1000ユニークを超えてました！

皆さん読んでいただき、本当にありがとうございます！

評価してくださったり感想を書いていただいた方にとっても感謝感激です。

自分は小説を初めて書く身なのでとても嬉しいです。

今回の話で時間をかなり進めました。

なので予定通り今週中にはISの世界に入ることができそうです。

そして後書きのほうにアンケートみたいなものをしておりますので是非ご協力をお願いします。

第5話

第5話

約三ヶ月前、G Aにコロニーアナトリアから傭兵が売り込まれたそう、リンクス戦争へのカウントダウンの始まりだ。

アナトリアの傭兵は次々と戦火をあげ、さらに、マグリブ解放戦線の出来事により瞬く間にその存在が知れ渡ったのだ。

そして約一週間前に、G Aグループ内である事件が発生することになる。G A Eが秘密裏にアクアビットと提携しG Aグループを離脱するという事件だ。そして、そのことがわかったG AグループはG A Eに対して、アナトリアの傭兵に粛清の意味を込めて“ハイダ工廠”で開発中の巨大兵器諸ともの破壊を要請したのだ。このことにより今まで水面下で対立していた企業間の争いが表面上に浮き出てきたのだ。

そして先ほど

「世界を私たちとともに変えないか？」

とのベルリオーズからの突然の申し出にレイジは驚きを隠せないでいた。

「なぜ・・・俺なんだ？」

「あれから、お前を見てきたが、私の予想通り、いやそれ以上によい戦士になっている。だからお前の力を借りたいと思ったのだ。」

そう言うベルリオーズに対してレイジは

「それは買いかぶりすぎだ、ベルリオーズ、俺なんかよりいい戦士は他にいるだろう？俺はあんたの言うような、よい戦士でもなんでもないただのリンクスさ、だからせつかくのお誘い悪いが、断らせ

てもらう・・・すまない。」

レイジは唇を噛み本当に申し訳なさそうにベルリオーズに告げる。
だがベルリオーズは

「そうか、やはりな。お前ならそう言うと思ってたぞ」

と言うベルリオーズの言葉を聞き

「なっ、あんたは俺が断ることわかっていたのか？」

「まあな、だが本当にお前のことはよい戦士だと思っているぞ。まあ、返事が変わることがあれば私に連絡してくれ」

ベルリオーズはそう言い静かに笑うと部屋を出て行った

するとレイジは「本当にすまない・・・だが、あんたの“答え”は俺がしっかりとみとめてやる」

と誰もいない部屋で言った

ベルリオーズ side

やはりレイジは、自身のことを過小評価しすぎだな、己を過小評価しすぎると自滅してしまうからな。だが私の思った通りだな。まあ、あいつが加わらないことは残念に思えるが。たとえあいつがいなくても私たちが世界を変えてみせる。

ふっ、それにしても私の“答え”を見届けるか、やはりよい戦士だ。

side out

そしてリンクス戦争は、次第に拡大していった。そして数カ月後、レイレナード本社はアナトリアの傭兵により壊滅し、アクアビット社はジョシユア・オブライエンの襲撃により壊滅。こうして主戦力たる二社が壊滅に陥りインテリオルグループは停戦を提議し、リン

クス戦争は幕を閉じたのだった。しかしこの戦争により企業はかつてないほどに消耗し、無秩序に地上のコジマ汚染はいつきに拡大し、多くのコロニーが消滅した。

それにより、人々は汚染された地上を捨て、人類の過半数は清浄な空でクレイドルと呼ばれる巨大プラットホームで生活をするようになった。

一方で国家解体戦争で企業が支配体制を確立した原動力アーマド・コア“ネクスト”と、その搭乗者“リンクス”その圧倒的な力の個体依存性に危機感を抱いた企業により、企業機構“カライド”管下の傭兵として地上に残されることとなる。

今や、企業軍の主力はアームズ・フォートであり、かつて戦場を支配したネクストたちは、この薄汚れた地上で延々と続けられる経済戦争の尖兵と成り果てていたのだ。

そして、リンクス戦争が終結してから約二年後
あの後レイレナードの多くの者達がオーメルサイエンス社に取り込まれていき、レイジもその中の一人であった・・・

「リンクス、実験を開始します」と通信がはいり
「了解」そう短く応えたとレイジは、ヴァンガード・オーバーボード・ブーストVOBがネクストにちゃんと接続されているかを確認しOBのスイッチを入れるすると次第に加速していきある程度加速するとVOBが点火しいつきに超加速をする。

レイジは、超加速によるGに耐えながらVOBの数値を確認していく、すると突然コクピットから警告音が鳴り響く。それはVOBに異常が発生しているという警告音だった。

(やはりな・・・)

とレイジは冷静に思う。それもそのはずだ。

レイジはもとはレイレナードの出身、リンクス戦争に敗退しオーメルに取り込まれたのはいいが、オーメルからみれば自分達がレイレナードを潰したようなものだ、もしかしたら復讐されるかもしれない。だがレイジは今までオーメルの新兵器の実験などになんもなく普通に受けていた。そう、別にレイジは復讐しようだのなんだのは全く思っていない、ただ実験の依頼が来たからそれをこなすというにしか考えていなかった。だが逆に、なにもしなすぎたのがオーメルから見れば不安だったのだ、以前はベルリオーズなどと一緒にいることが多かったので、実は何か企んでるのではと思い、事故を装いレイジを抹殺することに決めたのだ。

（俺は、こんなところで死ぬのか。今までの行いからみれば、まあ、当然か・・・）

と頭で自身の死を思っているても本能は生きようと必死にVOBのパージをしようとしている。考えていることは全く別の行動をとる体に対して思わず笑ってしまう。

（ふっ、そうだったな・・・俺はどんなに醜くても生きようとする奴だったな。なら足掻いてみるか）

そう思いどうにかVOBをはずそうと必死に操作する。やっこの思いでVOBをはずすことに成功したがその直後、VOBが爆発を起こしその爆発に巻き込まれる。するとレイジの乗るネクストはボロボロになり落下する。そして中のレイジも爆発の衝撃が凄まじくそのダメージを受けていた

「がはっ！ははっ、やっぱりこうなる運命なのかね・・・まったく、ついて、ない、な・・・」

吐血し、そう言うレイジは意識を手放した

とある扇動家 side

私は今日、とある企業の実験場に来ている。

（やはりな、彼のことを事故を装い抹殺しにかかったか。ふむ、企業としては正しい判断だな。企業の人間の9割は彼が死んだと思っているだろう。だが彼はおそらくだが生きているだろう。まあ、こちらには都合がいい。さて、あの人がよい戦士と認めた人物だ、接触を試みるか・・・）

そう思うと、とある扇動家は移動し始めた・・・

side out

レイジはふと目が覚めると目に映るのは白い天井である

「知らない天井だ・・・」

（あれ？なんかこんな状況前にも経験が・・・）

そう思っているとドアが開き、そちらのほうに顔を向けると一人の青年が立っていた

「どうやら目が覚めたみたいだな」

「お前が助けたのか？」

（どっかで見たことある顔だな？どこだったかな・・・そしてどことなく雰囲気がいっしょにしているしな、こいつもしかして・・・）

「ああ、そのとおりだ。まず名前を伺ってもいいか？」

「名はレイジだ、お前の名は？」

「私の名は“マクシミリアン・テルミドール”だ」

「お前、もしかして昔、何回かベルリオーズと一緒にいたことある奴だろ？」

「なんだ知っていたのか」

（やはりな、レイレナード時代にたまにベルリオーズと一緒にいるところを見たことがあるしな）

「いや、思い出したただだ。で、わざわざ助けたからには何か用があるんだろ？」

「まあ、用はあるが、まず先に話をしてみたくてな」

「話？俺なんかにか？」

「ああ、あの人が高く評価していたから気になってな」

「あいつは俺のことを高く評価していたが、実際そんないような人間じゃないさ」

（ふむ、聞いたとおり自身のことを過小評価しすぎているな）

「まあ、絶対にありえないが、俺が加わって戦況が変化するほどのものだったら、俺は、あいつの誘いを断り、見殺しをしたようなもんなんだぞ？」

「戦況が変わるかはわからないとして、見殺しにたと言うのは少し違うのではないか？あの人から聞いたぞ、あなたが断ったのを聞いて部屋をでたあと“答え”を見届けると言ったらしいじゃないか。確かに他の人間からすれば見殺しにしたのと同じになるだろうだが少なくとも私は、そうは思わない」

レイジは今回の実験も自分が事故に装い殺されるであろうと、わかっていてもそれは自身の贖罪だと思いつけ入れようとしていた。もしあのときベルリオーズの手をとっていたら、ベルリオーズやアンジエ、友と呼べる者が死なずに違う未来が訪れたかもしれない。だが自身はそれを拒んでしまった。そして友と呼べる者達が死に、気づいたときには遅かった。“答え”を見届けると言っても他人から見ればしょせんは自己満足からでた言葉なのである。だが目の前の

男はそのことも理解したうえでレイジの行動を否定せずにいてくれた。もしかしたら利用するために言ってるのかもしれない。だが、そのことがレイジにとってどこか救われるような気がしたのであった。するとレイジは「ありがとう」と静かに呟いた

「感謝される憶えはないんだがな、受け取っておこう。」

（ベルリオーズ、やはり彼は、あなたの見込んだとおりかもしれない）

「ふむ、話はこれぐらいにして。本題に入っていいか？」

「ああ、かまわない」

「まず私たちがやるうとしていることはクレイドルの前提を覆す明確な反逆行為だそれを理解したうえで聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ。

それをよしとしないのであれば、是非、私たちと共に世界を変えな
いか？」

「ふつ、いいだろう。こんな奴でよければ、仲間になる。」

「そういう不適に笑ってみせる

「じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？」

「そのことだが、もう一度、カレードに特定の企業に深く関わらないリンクス、つまり独立傭兵として加わり行動してもらうがいいか？」

「かまわないが、大丈夫なのか？俺は一度、殺されそうになった人間だぞ？そんなやつがまた表舞台にたったら面倒なことになるんじゃない？」

「やないか？」

「大丈夫だ。そのことも折り込み済みで君にはもう一度、表舞台に立ってもらう。まあ、死んだことになってるから名前などは変えてもらうことになるかな」

「わかった」

「では、新たな名前を決めてくれ。そうすれば私のほうで手をまわしておこう」

（名前か・・・ふむ、少し皮肉をいれてみようか、ならば・・・）

「きめたぞ、新たな名は“ジョン・ドウ”だネクストのほうは“ネームレス・ワン”で頼む」

「“ジョン・ドウ”と“ネームレス・ワン”か・・・ふっ、ずいぶんという意味ありげな名前だな」

「そうだろう？では、これから俺のことはジョン・ドウ、略してジャックとよんでくれ」

「そうか、よろしく頼む。ジャック」

そして、この日からレイジは新たな名、ジョン・ドウとなりORCA旅団に加わったのだ

第5話（後書き）

一応、この後は首輪付きは首輪付きで出します

そしてアンケートみたいなものですが、ISの世界に転生させる人で主人公とリリウムを入れる予定でいます

その他に首輪付きも入れようかと思っているんですが

入れてもありじゃないか？と思われる方は 1 で

首輪付きを入れるなんて絶対に許さない！みたいな方は 2 で

感想の一言のほうにお願いします。

締め切りは一応土曜の昼の12時までとしますのでご協力お願いします。
m (_ _ _ ;) m

第6話（前書き）

アンケートにご協力の方本当にありがとうございます。

アンケートのほうは、明日の昼の12時までとなっておりますので
ぜひ他の方もご協力おねがいします。

そして今回も時間をそれなりにすすめた感じがします。

なので結構無理やりな点がいくつかあると思いますがそこは見てみ
ぬふりをお願いします（汗）

第6話

第6話

レイジがジョン・ドウと名乗りORCAに入ってから約2年がたつ

新人リンクス side

俺は今、企業連からのラインアーク襲撃の依頼を受けた。

力をちらつかせた交渉は、我々の本意ではない、ねえっうん、絶対嘘だな。でもまあこれをやらなきゃカラードに登録されないだろうしな。

「おい、ミッション開始だ。下らんことを考えてないでさっさと行け。」

「了解」

いま通信で厳しいことを言ってきたこのバブ「貴様、ミッションが終わった」ゲフンゲフン！この綺麗なお姉さんは、俺のオペレーターをしてくれるセレン・ヘイズだ。

俺は約一年前に拾われてから、独立傭兵のリンクスとなるべく鍛えられてきた。

そして今回、カラードに正式に登録するために企業連のこの依頼をこなすわけだ。

ちなみに今、俺が乗っているネクストは旧レイレナードの03-A ALIYAHを ベースにしたのをストレイドという名でセレンさんが用意してくれた。

どうやって手に入れたのか気になり一度、聞いてみたんだが…

「なに、ちよつと話をしたら譲ってくれたぞ。」

とかなんとか言っていた。しかも話し相手は顔を真っ青にしてたら

しいとのことだ、恐ろしい…

「企業のネクストだと？」

「畜生、こんなときに限って！」

（さて、さつさと終わらせるか）

そう思うと次々と守備部隊をに倒していく

「目標、残り約半数」とセレンから通信が入る

「クソッ、効いているのか？」

「プライバル・アーマーだ、まずはプライバル・アーマーを減衰させるんだ！」

そう言いながら必死に抵抗してくる相手をさらに倒していく

「目標、残りわずかだ」とまた通信が入る

「通常兵器では太刀打ちできん！」

「ノーマルはまだなのか！ノーマルは！」

相手の言葉を気にせずに残りの敵を排除していく、最後の敵を排除したかと思うと

「敵、増援を確認。ノーマル部隊だ、油断だけはするなよ」と通信が入った

（めんどくさ！さつさと終わらせよう）

そう思い、増援できたノーマル部隊を殲滅していき。すべて倒すと

「よくやったな、ほぼ完璧だ」とは言え、あまり調子付くなよ。敵が弱すぎたのだからな。」

とミッション終了の通信が入った

（やっと終わったか…あれ？でもこのまま戻ってもさっきのことで俺、セレンさんに殺されるんじゃない？でも、ミッションはほぼ完璧だったから見逃してくれるかな…無理だな、あきらめよう。）

そう思い帰還を始めるのであった。

side out

そして、ラインアーク襲撃のあとカロードに新たなリンクスが登録される。そう…このあと次第にカロード全体を騒がせることになる後の首輪付きである。

そしてラインアーク襲撃から2ヶ月ほどたつころ、ジョン・ドウ
スピリット・オブ・マザーウィル
(レイジ)はカブラカン撃破の依頼を断り、SOMの撃破の依頼を受けることになっていた。

(オーメルからの依頼か、まあ俺は構わんが…メルツェルめ、何を考えている?)

そう思いながらもオーメル仲介人の説明を受ける

(VOBの使用か、また小細工して爆発されそうだな…まあ、いいか)

などと考えている間に仲介人の説明も終わっていた。

(それにしても、あの仲介人の話し方、イラッとするな…俺だけか?)

とくだらないことを考えながらも依頼を遂行するべく準備をしていた

そして数時間後、ミッション開始時間

「では、リンクス。ミッションを開始してください。」

「了解」そう言いレイジはOBを起動する。すると次第に加速していきVOBが点火し、いつきに超スピードになる。

(どうやらVOBに異常はないみたいだな)

そう思いながらも迫り来るSOMの砲撃をかわしながら彼我の距離をつめていく

「VOB使用時間、限界近いです。通常戦闘の準備をお願いします。」

「そう通信がはいり、少しして

「VOB使用限界です。パージします。では御武運を」

「そう言い通信が一旦、切れると同時に

「どりゃああああああ」

と場違いな声がしたほうを見ると、ギルドーザーが突っ込んできたのだ

「場をわきまえない解体家が、悪いがお前に構っている暇はないんでな」

「そう言うとレイジはOBをふかしSOMの懐に入り、次々に迫り来るミサイルをQBをうまく使いかわしていき右手の03-MOTORCORAと左手の051ANNRで発射口を潰していく

「ふむ、ミサイルの発射口はすべて潰したか、なら次はあの馬鹿でかい砲台か」

「そう呟いていると

「どすこおおおおおい」

とまたも場違いな声がする

「しつこい奴だ、まあミサイルの発射口はすべて潰したからないだろう、相手になってやる」

「そう言い右背をEC-0300に左背をDEARBORN03に切り替えギルドーザーに対して撃ち、QBを使い死角へと回り込むと03-MOTORCORAと051ANNRでひたすらに撃ち続ける。」

「そしてギルドーザーは両手のGAN01-SS-WDを当てようと突っ込むが難なく回避され銃弾の雨を浴びせられさらにボロボロになる。」

「めんどくさくなってきたな…もう終わらせるか。」

「そう言うと両手の03-MOTORCORAと051ANNRを捨てて格納してあるレーザーブレードのEB-0600で死角

から確実にコアを切りつける。するとギルドーザーは
「やっぱりかああああ！」

と叫び声が聞こえると沈黙した。

「さて、予定より時間をかけてしまったな。さっさと砲台を壊しに行くか」

そう言い、砲台に近づき一閃、二閃と切り裂き、もう一つの砲台も同じように切り裂き破壊するとSOMが崩壊し始める

「総員、地上装備！総員退避！退避しろ！マザーウィルが崩壊するぞ！」

そうSOMの隊員が言うのを聞き、OBをふかし爆発に巻き込まれないように離脱する。そして安全圏まで離脱すると

「こちらネームレス・ワンだ、SOMを撃破した。」

「マザーウィルの撃破確認しました。速やかに帰還してください、お疲れ様です。」

そう聞くと通信を切り帰還する。

そしてほぼ同時刻、レイジが断ったもう一方のカブラカンを撃破するミッションは首輪付きがこなしていたのであった

カロードside

「あの無名のリンクスが、あのマザーウィルを……？」

「はい、間違いありません、ローディー様、カロードは情報の精度を確認しています」

「……」

「仮にもリンクス、本来そういうものだろう」

「だといいがな…それよりアルテリア襲撃犯はどうなっている？堂々とクレイドルの要諦を狙われ、すべて不明、全く打つ手無しなど、管理者の存在意義が問われるだろう」

「その通りだ、ルールを守れないのであれば、静かに退場してもらう他はない。それがラインアークであれ…レイレナードあたりの亡霊であれ…」

side out

リリウムside

私は今回のマザーウィルが撃破されたことに興味を持っていました。いえ、マザーウィルが撃破されたほうではなくて、撃破したリンクスについて興味をもっていました。もしかしたらあの人ではないかと、そしてマザーウィルを撃破したリンクスは、あの人が死んだと言われてから数日の内に急にカレードに正式に登録をされ、その内容はあまりにも自然すぎるもので、私は、あの人は実は生きているのではないかと…そして今回のことでよりいっそう真実に近づけたと思いました。

side out

ORCAside

「カブラカンをおとすか。どうして、なかなかいるものだな」

「ああ…モノによつては、首輪をはずそうと思う」

「ハリのように、か？それもいいがなメルツェル」

「案ずるなよ、ジュリアス」

「間もなく、マクシミリアン・テルミドールは我々に戻る…それで準備は終わりだ」

side out

カブラカン撃破から約1ヶ月後、首輪付きのもとへ企業連からホワイト・グリント撃破の依頼が来て首輪付きはそれを受託する。

そしてレイジの方にはラインアークから依頼が来て、それを受託した。

「これで、後は計画通りやればいいのか…」

そう言い、依頼の為に準備を始めるのであった

そしてラインアーク防衛戦が始まる。企業連側は、ランク1のステイシスと首輪付きのストレイド2機に対して、ラインアーク側はランク9のホワイト・グリントとネームレス・ワンの2機で応戦する。戦闘は最初から激しかった、そして中盤に差し掛かった頃、最初に落ちたのはネームレス・ワンである。ステイシスのレーザーバズーカER-0705により戦闘不能となり海中に没する。そして次にステイシスは距離をとるためか、OBを使い移動し、それをホワイト・グリント逃がさんとはかり追う。結果ホワイト・グリントの撃った弾丸がステイシスのメインブラスターに直撃し水没し、1対1になり、ホワイト・グリントもすでに疲弊しきっているにもかかわらず2機の戦いは凄まじかった、そして最後に勝ったのはストレイドであった。

ラインアークの最も重要な戦力、ホワイト・グリントは失われ、オツダルヴァとジョン・ドウも水中に没する。こうしてラインアーク

クでの戦闘はただ一人のリンクスだけが生き残って終わる。そしてクレイドルは、安定期に入った。誰もがそう考え、企業は来るべき経済戦争の激化に備えはじめる。だが、まさにこのとき、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのだ。

ORCA side

「ホワイト・グリントは戦闘不能。ステイシスとネームレス・ワンは海中に没し、オツツダルヴァとジョン・ドウは生死不明、か」
「これはちよつとな」

「ああ、やりすぎだな、メルツエル」

「よく言う、誰が手間を掛けさせたのか」

「すまん、完璧主義者なんだ」

「…まあいい、これでやっと元に戻ったんだ。時期もある、クローズ・プランを開始しよう」

「そのことだが…少しだけ待てないか？」

「パートナー、か」

「ああ、強いだけの阿呆でもないようだ、試す価値ぐらいはあるだろう。」

…状況は既に手遅れだが、同時に緩慢だ。今更焦ることもあるまいよ」

（さて、あの首輪付きは俺たちのところに来るかね…？）

side out

そして数日後、首輪付きのもとへとある依頼が届いたのであった…

第6話（後書き）

このペースで行くと明日にはA C f aの世界が終わり、I Sの世界に突入することができそうです。

なので一生懸命頑張るので、よろしくお願いします。

第7話（前書き）

更新が遅くなってまことに申し訳ありません

リアルの用事がかなり伸びて家に帰ってくるのが遅くなり更新が遅りました。

すいませんm(_ _)m

いろいろ独自設定みたいなものを加えたルートとなっております。

そして、一応今回の話でACの世界は終わります。

そして無駄にながいですけどどうぞご覧ください。

第7話

第7話

首輪付き side

首輪付きのもとへ、一件の依頼がくる。依頼人は“ORCA”そして依頼内容は

「初見となる。こちらマクシミリアン・テルミドールだ。

GAのアルテリア施設、ウルナに侵入しすべてのアルテリアを破壊してほしい。

この作戦は、クレイドルの前提を覆す、明確な反逆行為だ。それを理解した上、で私の言葉を聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ…それをよしとしないのであれば、私の依頼を受けてみないか？

勿論、報酬は払おう…期待して待っている。」

との内容のことであった。そして、首輪付きはこの依頼を受けることにした…

そしてアルテリア・ウルナ破壊ミッション、開始。

「ミッション開始、目標は遥か上だ、登っていくぞ…」

わかっているな？自分がやろうとしていることの意味が…」

「わかってるよ、セレンさん。今からやろうとしていることによつてどうなるかは…」

俺は、今まで他人から言われたままにしか行動しないでいたけど、今回は違う。

確かに扇動されたと言われればそれでおしまいかもしれないけど、俺は今、自分自身で出した“答え”によつてここにいるつもりだよ」「そうか…」

セレンはそう呟くと、そこで通信がいったん途切れた。

そしてストレイドは、最短ルートで上昇していき目標までたどり着くと、周りの防衛部隊を壊滅させ、目標を次々と破壊していく、そして最後の1つを

「これが、俺の出した“答え”だ」

そう言つと、いつもより重く感じる引き金を引いた。

そしてミッション終了後

「君の答えは、見せてもらった、ようこそORCA旅団へ」

と連絡が入り、このときをさかいに首輪付きは、ORCA旅団へ加わったのであった

そして首輪付きがアルテリア・ウルナを破壊してから約1週間後
レイジと首輪付き、二人にはほぼ同時刻に依頼がはいる

レイジside

「さてクロース・プランを開始する。ジャック（レイジ）、君にはアルテリア・カーパルスを首輪付きとともに襲撃してもらいたい。」

「首輪付きと一緒にか？別にかまわないが、あいつ一人でも充分だろ、保険だとしても後方で待機していればいいと思うんだがな」

「まだ、完全に彼の力を把握しきれてないからな……」

「ふむ、そういうことにしておこう。それにしても、ずいぶんとあいつのことを気に入っているみたいだな」

「ふつ、まあな……」

「では、俺は行かせてもらおう」

「ああ、最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ、派手にいこう」

side out

首輪付き side

「マクシミリアン・テルミドルだ、クローズ・プランを開始。主要アルテリア施設に対し、ネクストによる同時攻撃をかける。

君のターゲットは、大規模アルテリア施設、カーパルスだ、防衛施設の要、ノブリス・オブリージュをジョン・ドウのファンタズマとともに撃破してくれ。

施設には多数の防衛部隊も展開している、ノブリスの到着前にこれを叩くことができれば、その後の戦闘が幾分か楽になるだろう。

最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ。諸君、派手にいこう」
(ジョン・ドウ？ラインアークのホワイト・グリント撃破のときのやつか？まさか生きてたのか？どちらにせよ今回は味方らしいから、まあいいか)

首輪付きはそう思うと、ミッションの準備をしにかかった

side out

アルテリア・カーパルス襲撃ミッション開始

「ミッション開始、カーパルスを制圧する。

ノブリス・オブリージュが戻る前に、可能な限り防衛設備を破壊しておけ、それだけ楽になるのだからな」

とセレンからの通信が入る

「お前が、噂の首輪付きか。今回のミッションをともにする、ジョン・ドウ、ファンタズマだ。よろしく頼む」

「ああ…なあ、あんたは」とレイジに質問をしようとすると

「すまんが、聞きたいことがあるならこのミッションが終わった後にしてくれ」

とレイジの言葉にさえぎられる

そして二人は次々とカーパルスの防衛設備を破壊し、約2分ほどで全て壊滅させる、するとセレンから

「敵ネクスト反応、急速接近。くるぞ！本番だ。敵ネクスト、ノブリス・オブリージュを排除する」

と通信が入る

「ほう、意外と早かったじゃないか。いくぞ首輪付き、まあ見物するならするで構わんがな」

そう言いながらリーダーを確認するレイジ。すると

「空き巣とは、なんとも情けない…匪賊には、誇りもないのか？生き易いものだな、羨ましいよ」

と言いながら、ノブリス・オブリージュがOBで突っ込んでくると右手に持っているMR-R102を撃ってくる

「さあな…たとえあつたとしても貴様に教える気は無いがな」

レイジはそう応えながら右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRで応戦する

そして首輪付きは、右手の063ANARと左手の01-HITM

ANでレイジにあたらないようにノブリスを横から撃っていく

「そうか、2対1でいどんでくるとは…さらに情けないな」

「ジェラルド・ジェンドリン、貴様は勘違いしているぞ。これは決闘ではなく戦争だ、戦争に2対1で卑怯などとは言ってられないんだよ。それなのに誇りだのなんだのと言ってたら無様に死ぬだけだ」

「なんだと…？」

「ふむ、いいだろう。貴様が望むように1対1で勝負をしてやろう。まあ、貴様の誇りなんぞ興味無いがな」

「その行動…後悔してもらおう」

「てことで、すまんな首輪付き」

「いや、構わない」

そういうと首輪付きは攻撃をやめ離れる。そして真っ先に動いたのがノブレスである

右手のMR-R102で弾幕を張りながら左背のEC-O307ABを確実に当ててこようとする。だがレイジはそれを、QBを使い難なくよけていき03-MOTORCOBRAと051ANNRで撃ち返し確実にノブリスのAPを削っていく。

「どうした？そんなものか…誇りだのなんだの言っというてその程度とはな、だったらそんなもの（誇り）、狗にでも喰わせておけばいい」

「貴様っ…！」

ジェラルドは珍しく、怒気を含んだ声で言い、左背のEC-O307ABをパージし地面に落とすと、左手のEB-O305でレイジに切りかかる。

が、レイジはそれをあっさりと避け右背のEC-O300でノブリスのコアを確実に撃ち抜く。

「信じられん…ノブリス・オブリージュが、こうまで押さえられんとは…」

そう言い、ノブリス・オブリージュは沈黙した

「ネクスト、ノブリス・オブリージュの撃破を確認」

とセレンから通信が入る。

「身勝手な行為、すまなかったな。首輪付き」

「気にするな、こっちは楽できたと思えばいいさ」

そう会話してると

「やはり敗れたな…ジェラルド・ジェンドリン。貴族の務めなど、大層な御託の割に…クククツ。まあ、俺が尻拭いをしてやるとするか」

と声がする。するとセレンが「増援か、なるほどな。」とどこか納得したように言い

「二機でかかればよいものを…敵ネクスト、トラセンドだ。これも排除する。」

別行動を後悔させてやれ」と続けて言った。

「了解。じゃあ、さっさと終わらせちまおう」

「了解した」

そう言うと言輪付きとレイジはトラセンドに向かっていき銃弾の雨をひたすらに浴びせる。トラセンドは必死に振り切ろうとするが全く振り切ることができず一方的にやられた

「フツ…勝って、勝って、最後に負ける運命か…お前らも同じだ。」

それまで、精々浮かれてるがいい…」

そっぴい残すとトラセンドも沈黙する

「ネクスト、トラセンドの撃破を確認。ミッション完了だ。…クローズ・プランのはじまりか」

と言い、首輪付きだけに

「後悔するなよ、お前の選択だからな」と通信を入れる
「わかってるよ、セレンさん」

こうしてアルテリア・カーパルス襲撃のミッションは完了した

7月、多くにとって突然に、それは起こった。

正体不明の、複数のネクススト機による、アルテリア施設の同時襲撃、その殆どは成功し、クレイドルは、拠って立つエネルギー基盤を大きく揺るがされた。

そして、ORCA旅団と、旅団長マクシミリアン・テルミドールの名で、ごく短い声明が、世界に発信される。

“To Nobles Welcome to the Earth”

それは、すべての空に住む人々への、明確な宣戦であった。

企業は、安全な経済戦争を放り出し、狂気の反動勢力にたいすることを余儀なくされ、

人々は、覚束ない足元にはじめて気付いたかのように、それを恐怖するしかなかった。

ミッション終了後、首輪付きとレイジはとある部屋で話していた

「なあ、あんたは、ラインアークで俺と戦ったやつで間違いないよな？」

「その通りだ」

「なんで、ORCAに入ったんだ？俺みたいにテルミドールに誘われたのか？」

「そうだ、と言っても俺の場合は、ずいぶんと前に企業に殺されそうになつてな、瀕死のところをあいずに助けてもらっただけだな」

「企業に殺されそうになって、じゃあ企業に復讐のためにいるのか？」

「違うぞ。まず、俺は復讐なんてものは考えたことがない。俺がここにいるのは企業が支配するこの世界に未来はないと考えるのと、ある意味、贖罪のためだと言ってもいいな」

「贖罪？」

「そうだ、贖罪だ…自分の友を、見殺しにしたとも言えることをしてしまっただけだな」

「でも、戦場だったなら仕方ないんじゃない？」

「確かに、そう言えば楽かも知ない…だが、戦場だったからなと何かを理由にして自分の罪から逃れようとしてはいけない。たとえ自身の罪から目をそらしたところでその罪は消えないんだ。だからこそ自身の罪と向き合い生きてかなければいけない。少なくとも俺はそう思っている…お前も自身の罪から目をそむけないようにな」
そう言うときレイジは部屋を後にした

そして三日後、

レイジのもとへ衛星軌道掃射砲防衛の依頼がはいる

「衛星軌道掃射砲の存在が、企業側に漏れた」

「なるほど、企業連は全力で潰しにかかるだろうな。で、クローズ・プランの要諦である衛星軌道掃射砲を守ればいいんだろう？単独でか？それともパートナーをつけてくれるか？」

「話が早くて助かる、銀翁と共に守ってくれ。そしてすまないが、銀翁以外に追加の戦力を用意することはできない」

「そうか…ん？首輪付きはどうした？」

「彼には、オールドキングを粛清しにいつてもらおう」

「なるほど…やはりオールドキングは、クレイドルを落とそうとするか」

「なんだ、気づいていたのか？」

「まあな、じゃあ、さっそく準備をさせてもらおう。前のミッションで手に入れたものも試してみたいからな」

「そうか、では、頼む」

そして通信が終わるとレイジはネクストのある格納庫へ歩いていった

衛星軌道掃射砲防衛ミッション開始

「この作戦のパートナーは、お前さんか、期待させてもらうぞ。あと私は、アサルト・キャノンを使う、くれぐれも巻き込まれるなよ。君だと手、無事では住まんのだからな」

「了解した。」

レイジはそう短く応えたとOBを使いAF・イクリプスの上に取り付き右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRをひたすらに撃つ。

そうすると、あっという間にイクリプスがボロボロになり撃破される。

「アンビエント、目標を確認しました。問題ありません、作戦を開始します」

と言いながら、攻撃してくるネクストを確認する。するとレイジは「っ！」

と、思わず驚きの声をあげようとしてしまふ。それもそのはずかもしれない…なんせ、目の前にいるのは昔、自分が助け、髪飾りをプレゼントした少女。そう、リリウムなのである。

レイジはどうしようもなく叫びたかった。なぜ、なぜ、こんな所（戦場）にいるんだ！と、だがここで冷静さを失えば全てが終わってしまうと考え必死に冷静さを取り戻した。

（どうする？どうすれば殺さずにすむ？どうすれば…）

彼は今、自分の中の矛盾に酷く焦っていた。そう例えどんな相手だろうと戦場に生き残るために殺すという考えでいて、今回も心を非情にしてそうしようと思っても、なぜかそれができないのである。もしここで選択を間違えたら取り返しの付かないことになるかと直感的にわかっていた。

（今までさんざん自分に非情になれ。そう言ってきたのにな、笑わせるだが…たとえ矛盾で、身勝手な自己満足で他人から偽善者と罵られようといいさ、今回は俺のやりたいようにやるさ）

そう決断すると先ほどまでアンビエントの攻撃をほぼ避けるだけでいたレイジは03 - MOTORCORAと051ANNRで応戦しはじめる。

レイジはアンビエントの死角に必死に回り込み腕か足の間接部とコアをあまり大破させないようにメインブースターなどを攻撃していくだが相手はランクはNo.2である。いくら政治的な理由でNo.2とされたからといって弱いわけではなくしっかりと強いのである。ただ倒すだけであつたら何の問題もないだろうが、今回は殺さないようにとしているのである。

そしてアンビエントとファンタズマが激しい攻防を繰り返していき消耗戦になると思われたが、突如均衡が崩れたのである。

遠距離からネオニダス（銀翁）のネクスト月輪の左腕のプラズマライフフルFLOORITEが撃たれリリウムが慌ててそれを回避しようとし隙ができるレイジはその隙を見逃さず左手の051ANNRを捨てて格納されているレーザーブレードEB - O600でアンビエントの片足を確実に焼き切り、バランスを崩したところをすかさず03 - MOTORCORAで追い討ちをかけ行動不能状態にする。「アンビエント、戦闘不能、作戦は失敗です。」

すみません、王大人。リリウムはご信賴に背きました」

そういつてると突如、弾丸が飛来し、その弾丸は、アサルトキャノンサイレント・アバランチを破壊するために撃った直後でありP

Aが回復しきつてない月輪のコアにあたる

「ぐっ！」

「遠距離射撃…まさかストリクス・クアドロか！銀翁、大丈夫か！」

「ほう、さすがに気づくか。よい勘をしている」

「なんとかな、にしても密かに狙撃とはな、実にあの男らしい」

そう言いながら月輪がストリクス・クアドロに近づいていき交戦を始める。すると王小龍は

「リリウム」と呼びかけ言葉を続ける

「貴様は私が貴様に信頼しているのだと思っているが勘違いをするな、私は今まで一度も貴様を信頼だのとは思ったことが無い。それにしても役に立たない駒だったな。ネクスト一機すら落とせずにいるのだからな。まあ貴様の代わりなどいくらでもいるからなもう用は無い、消えろ」

そう言うとしりりウムは

「そん、な…」

と今にも消え入りそうな声ので喋る

そして王少龍は動けないアンビエントに対しコアに狙いを定め引き金を引いた

だが弾丸が到着する前にレイジのファンタズマが間に入り盾となる

「下種野郎が…」

レイジはそう言うとしりりウムのEC-O307ABをストリクス・クアドロに向けて撃つと相手の左腕を吹き飛ばす

そして立て続けに月輪がHLR01-CANOPUSを当てると

「ふむ、やはり私ではこの程度か」

そう言うとしりりクス・クアドロは撤退していく

「尻尾を巻いて逃げるがよいよ、王小龍。戦場に陰謀家は不似合いだ。

それにしても、どうやらわしもここまでのようだな」

「銀翁、すまない…」

「なに、気にするでない。もともと長くない命だ、なに、作戦は果

たせた悔いはない。君が気負うことではない。この後のことは頼んだぞ？」

「ああ、まかせろ」

「そうか、遂げるよメルツェル。」

そう言うのと銀翁からは通信が一切返ってこなくなった

そしてレイジはアンビエントに近づきファンタズマを降りコクピットのハッチを外部のスイッチで強制的にあける。すると中にいたリリウムはレイジのことを見ると

「あなたは…レイジ、さん？よかった、また、会うことが、できた…」

そう言うとりリリウムは気を失う。するとレイジはリリウムを自分のネクストに乗せ帰還した。

そして衛星軌道掃射砲防衛の作戦の翌日

「作戦の翌日ですまないが、さっそくミッションの説明をさせてもらう。

ミッション内容はインテリオルⅡオーメルの最新型AF・アンサラーを撃破してくれ」

「あの、最新コジマ技術の塊か」

「ああ、他のAFと比べても、圧倒的な戦闘力を持っている」

「だが、それを制すれば、一気に最終段階、だろ？」

「その通りだ、そしてメルツェルの予想だと相手はこれにさらに追加の戦力、恐らくネクストあたりを入れてくると思っっているらしい」「アンサラーとにもか？」

「ああ、どうやら使い捨てをするつもりようだ」

「なるほどな、いかにも企業連らしいな」

「確かに、そしてこのミッションの開始は6時間後だ、頼んだ」
「わかった」

そう言いレイジは自分の部屋にいったん戻った

リリウムside

「ここは…」

リリウムは目を覚ますと目の前には白い天井がある。

そして上半身を起こし周りを見てみるとリリウムには見覚えが無い部屋だった。

そしてリリウムは、起こった出来事を思い出そうとしていった。

（そう、私は王大人に捨てられたのでしたね…でも最後に気を失う寸前にレイジさんが助けに来てくれたような気がします。たとえ夢だったとしてもまた会えて嬉しかったです）

そう思うと。リリウムは急に涙を流し始める。

すると、扉が開き部屋に誰かが入ってきた。そして

「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言ってくる人を見ると、その人はレイジだった

side out

レイジはテルミドールからミッション内容を聞くとリリウムを寝かせている部屋にいき、そしてドアを開けるとリリウムは泣いていた
「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言くとリリウムはこちらを向き

「レイジ、さん？」と言う

「ああ、久しぶりだな、リリウム」

レイジはそう言いリリウムの頭を撫でる。するとリリウムは「会いたかった、ずっと、ずっと会いたかったです…！」
そう言うところリリウムはレイジに抱きつき涙を流す。そしてレイジは泣いている妹を落ち着かせるかのようにして頭を優しくそつと撫でるのであった。

そしてリリウムが落ち着くと、二人は今までのことを話していた。
レイジはリンクス戦争のあと自分がどうなり、どうしてORCAに入っただのかを、そしてリリウムのほうもウォルコット家に迎え入れられてからんどを、そしてあつという間に時間がすぎ、ミッシヨンの時間が迫る

「レイジさんは、だからORCAに入っただのですか…」

「ああ、他人からみたら笑える話だろ？」

「そんなことないです！少なくとも私はそうは思いません！」

リリウムはそう力強く言う

「そう言ってくれるか、ありがとう」

そう言い微笑みながらリリウムの頭を撫でるとリリウムは少しうつむき頬を赤らめる

するとpipipiと携帯端末から電子音がし、見てみるとミッシヨン開始の2時間半前であることをアラームが知らせてくれた。

「悪いが、今からミッシヨンなのでな私は行くとするか」

そう言い椅子から立つとリリウムが袖をつかむ

「さっきも言ったが、ミッシヨンには連れて行けないぞ」

「大丈夫です。だから考えました、私をオペレータとしてください
！」

「オペレータはいなくても大丈夫なんだがな…」

「いえ、今回のミッシヨンはとても危険なんですよね？でしたらリリウムが引き受けます！」

「だが、オペレーターの知識は」と言おうとしたところをさえぎられ
「いえ、ウォルコット家の教育の中にオペレーターとしての教育も
あったので、完璧にすせてあります」と言う

それを聞きレイジは自分のこめかみを軽く押さえ考え込む。すると
リリウムが

「私は、不安なんです。もしかしたらレイジさんがまた急にどこか
遠くへ行ってしまふのではないかと…」そう静かに言う。それをレ
イジは見て

「わかった、よろしく頼む」

「はい！」とリリウムは力強く返事をした

そしてAF・アンサラー撃破ミッション開始

「ミッション開始です。AF・アンサラーを撃破してください」

「了解。さてあれをどうするか…」

「そうですね…もしかすると、あれほど巨大なものを浮かしている
ということは、無理をして浮かしているかもしれません。どこでも
構わないので外装を破壊していつてください。そうすれば何れもた
なくなり、崩壊するはずです」

「わかった、助かる」

そうレイジは、言うアンサラーに近づいていき外装部分を左腕の
“07-MOONLIGHT”で切り落としていく。そう、この
“07-MOONLIGHT”は先日ミッションから帰還後に真改か
ら、ずいぶんと昔、アンジェが死ぬ前にレイジに渡すように伝えら
れてたらしく左腕の“07-MOONLIGHT”を受け取ったのだ
「まず一枚目」

そういいながら次の外装部分を破壊していく、すると

「作戦エリア全域に高濃度コジマ粒子確認！これではP Aがやくにたちません、こちらだけP A無しと言うことになります。それにしてもこのあたりは閉鎖空間ではないはないんですよ！企業はこの地上をどうするつもりなんでしょうか…」

「さあな、それを考えるのは後にしよう」

そう言っているあいだも無数のミサイルがまた襲ってくる

（やはり、このミサイルの発射口から潰していくか）

そう考えるとレイジはミサイルの発射口を潰しにかかる。そして天辺の発射口を潰しにかかる

「中心に大規模コジマ収縮、離れてください！消し飛ばされてしまいます！」

とりりウムが焦りなが言っているとレイジは急いで退避し直撃はしなかったものの少しくらってしまふ。そこに追い討ちをかけるかのごとく無数のミサイルが来る。それをなんとかQ Bを使い避けようとするがいくつか当たってしまう。

「A P 40 % 減少！」

その言葉を聞き必死に発射口を潰す。

（これでミサイルの発射口はすべて潰した、次だ！）

そう思い次々に外装を破壊していく

「アンサラー、そろそろ限界です。アンサラー落ちます、巻き込まれないでください」

そういいQ Bを使いその場を離れるレイジ

「アンサラーの大破を確認しました。…っ！そちらに高速で何か接近してきます！これは…プロトタイプネクスト！どうしてそこに！？」

（やはり、O R C Aだけではなく企業側ももっていいいたか）

「おそらく企業のだろう、そいつも破壊する」

「無茶です！すでにA P が半分をきっています、撤退してください！」

「心配するなりリウム、俺を信じろ」

「わかりました…必ず、必ず帰ってきてください」

「ああ」

レイジはそう言うとプロトタイプネクスト、00 - アレサARETHAに向かつていく

プロトタイプネクストはレイジの乗るファンタズマを確認すると右腕のガトリングでうってくる

それをなんとかかわしながら右手の03 - MOTORCOBRAで撃ちながらどうにか隙をついて左の07 - MOONLIGHTで切り刻むがプロトタイプネクストはまるで消えたかのような速さのQBを使われせいぜいかすらせることしかできない、そしてガトリングによりどんどんボロボロになるファンタズマ

（もう限界が近いか…だが確かやつは、コジマキャノンを使う前に動きを止めるはず、そこにかける！）

そう思い必死に避けるレイジ、そしてついにプロトタイプネクストは動きをとめコジマキャノンを使うとする。するとレイジはプロトタイプネクストに対して突っ込み左手の07 - MOONLIGHTで切りかかる、するとプロトタイプ・ネクストはコジマキャノンを発射する。だが直撃はせず、ファンタズマの右腕と右背のEC - 0307ABが吹き飛ぶ。だがレイジはそれでもとまらずに左手の07 - MOONLIGHTを振るつうとプロトタイプネクストのコアを完璧に焼き切った。するとプロトタイプネクストはコジマ粒子を漏らしながら爆発していった。すると

「レイジさん！大丈夫ですか！？レイジさん！」

リリウムが泣きそうな声で通信をしてくる

「ああ、なんとか、終わ、った…そして、すま、ない

俺は、もう、駄目、みたい、だ…」

「そんなことつ、そんなこと言わないでください！」

通信越しに必死に叫ぶリリウム

「いや、いい、んだ、最後、に、お願い、が、あるん、だが」

「大丈夫、です。なんでも言ってください」と泣きながら答える

「俺、の、死を、気負、わないで、くれ、そして、つよく、生きて、くれ…」

（テルミドール、先に逝って待ってる、首輪付き、成し遂げるよ…

そして、ベルリオースにアンジエ、今、そっちに逝くよ…）

その言葉を最後にレイジからは一切、返答が返ってこなくなった…

第7話（後書き）

前回の話みたいに結構無理やりなところがありますがそこら辺はできればスルーの形でお願いいたします（汗）

なんはともあれこれでISの世界に飛び立つことになります。
そしてアンケートの結果ですが

首輪付きもISの世界に突っ込むことになりました

アンケートにご協力してくださった方本当にありがとうございます。

ぜひ、これからもよろしくお願いします。 m ((m

第8話（前書き）

はい、前回ACの世界で死んだので
今回からISの世界にきましたがまだIS本編にはなりません
本当に申し訳ない。

次からはだんだんとISに関わるようになっていきますので、
よろしく願いします。

第8話

第8話　　真・プロローグ的な

冷たい雨が降っているなか、とある少年が目を覚ます。

「ここは…」

そう言いあたりを見回すとどうやらどこかの路地裏みたいだ。

「なんで、こんなところに…俺は死んだんじゃないかったか？」

そうばそりと呟くと、はっと気づいたかのように自分の体を見ると驚きの声が隠せなかった。

「なん、だと…？」

それも、そのはず。彼の体は5歳ぐらいの少年になっていた。

（あれか？コジマの力か？それともスタンドの能力か？もしかして某少年探偵コ○ンの黒ずくめのあの薬か？）

そう冗談まじりに思いながら自分の服装を確認する。

彼の服装は、ボロボロの長ズボンに、長袖か、そしてこのでかいマントのようなボロボロの布切れである。

そしてその服装から自分がどのような状況を推察してみることにした。

（おそらく、また別の世界に来てしまったのか？そしてあれか、この世界では親に捨てられたかなんかか？それとも誘拐事件などに巻き込まれたか？まあとりあえず人通りのあるところにでてみるか）
そう思い、めんどくさそうに片手を首に軽く当てると手に違和感を感じ慌ててもう一度手で触り確認する、しかし触れば割るほどとも覚えのあるものだった。

「まさか、AMSか？鏡を使って見ないことにはなんともいえないが、おそらくそうだろうな」

そう愚痴りながらも人通りのあるほうへ歩いていき、路地裏をぬけ

ると目の前の光景に少し驚く。

「まさか、俺は戻ってこれたのか？」

そう、目の前には少し変わっているが自分がいぶん前に、日常的に見ていた日本の光景であるからだ。

「あたりに所々置いてある店の看板も日本語だ」

そう言いながら突っ立っていると行き交う人々からかく視線を感じると自分の姿がのことふと思い出す。すると慌ててその場から離れるためにどこかに走っていき、ある程度離れると止まり、辺りを見渡す。どうやらいつの間にか人通りの少ないところに来てしまっているようであった。すると体の力が急に抜け倒れてしまう。

「あれ？力が、はいんない…？」

そう、さっきまでは無我夢中で動いていたが、この体はおなかが極限にまで減っており、栄養不足とも言わんばかりの状態であった。

「これって、まずいんじゃないか？はあ…転生そうそういきなりこれとは、運が無いなまったく…」

そう言いただボーっと何も無いような景色を見ていた。すると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と言い慌てて駆け寄ってくる女性。すると男性が近づいてきて

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ！」

そう言う孝弘と呼ばれる男性はレイジを車に乗せ移動していった。

とある男性 side

僕は三嶋 孝弘といい、とある町の小さな病院の院長だ。

今日は、病院の皆が、娘の由利香の誕生日だからと言って妻の裕子と共に早く帰るようにと気を使ってくれたから、その言葉にあま

えて妻と一緒に帰ることにした。そして帰り道の途中に妻が急に「孝弘さん止まって！」

と言ったので慌ててブレーキをおもいつきり踏んだ。すると道の端の方に人のような大きなものがあつた。すると妻は慌てて車を降りて駆け寄っていく。僕も降りようとすると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と聞くと僕も急いでその子の近くにいき声をかけた。

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ！」

僕はそう言つと妻と共にその子を車に乗せると病院にむかいアクセスルを踏んだ。

side out

「…ここは？」

そう言い目を開けるレイジ

（何度目だろうか？この状態になるのは…）

そう考えてると扉の開く音がして白衣姿の男性が入ってくる。そして男性はレイジが目を見ましたんだねをみて

「よかった、目を覚ましたんだね」

と安堵の表情で言つた。

「あなたが助けてくれたんですか？」

「そうだよ、僕の名前は三嶋 孝弘っていうんだ、この病院の院長をやっているんだよろしく。でも驚いたよ、僕が帰る途中に妻が倒れてる君を見つけたんだ」

「そうですか、ありがとうございます。あつ、あと俺の名は久瀬 零治です」

「零治君か、よろしく。」

そう微笑みながら言う

「あと、起きたばかりで悪いけど質問をしてもいいかな？」

と少し真面目な表情になる孝弘。

「ええ、大丈夫です」

と零治が言うと

「まず君の親御さんはどうしているかわかるかい？」

「いえ…わかりません」

「そうか…次に、なぜあんなところに倒れていたんだい？」

「気づいたら、路地裏にいてそこから途方もなく歩いていたら、急に体に力が入らなくなっ

「てことは、その路地裏にいた前の記憶はないということかな？」

（やってしまったな、名前はおぼえてるのにそれ以外が都合よくぬけているとなると、あやしまれるだろうな、さてどうする…）

そう自分のミスをどうフォローしようか必死に考えていると孝弘は「ふむ、過去の出来事はとも思い出したくなって自分の名前以外を思い出さないようにしているのか？それとも…」

などと、ぶつぶつと独り言のように喋っていき

「多分、君は本能的に嫌なことを思い出さないようにしているんだろうな」

と零治の状態を告げたのであった

（まさか、納得したのか？まあ何も追求されずにすむならそれでいいが…）

と思っていると

「最後に1つだけいいかな？」

「はい…」

「首のところに埋まっている機械は、なにかな？」

そう言われると零治は一番聞かれたくないことを聞かれて一瞬、とても驚くがすぐさま冷静に落ち着き

「首…？」

と知らなかったかのように言い、自分の首を触りまるで初めて気づいたかのように演じた。それを孝弘はみて

「どうやら知らなかったようだね、すまない。もしかしたら君はそのことが嫌で記憶を閉ざしたかもしれないのに」と申し訳なさそうに言う。

「いえ、驚きましたけど記憶が無くてなんとも感じないので大丈夫です」

「そうか、ありがとう。で、今の君にこんなことを言うのもあれだが…さっき警察の知り合いに聞いたんだが、どうやら最近是谁の捜索願いも出されて無いらしくてな…」

となんとか濁そうとしているが

「要するに、俺は捨てられたんですね？」

そう聞くと孝弘は

「すまない…」

と言い頭を下げる

「孝弘さんが謝る必要はないですよ。俺もなんとなく気づいていましたし、親の顔も思い出せませんから」

「そうか…なあ、急に言うのもなんだが、もしよかったら僕の養子にならないか？」

と突然の申し出に驚く

「いいんですか？俺みたいなものを養子になんてして」

「もちろん構わないさ。まあ、君が嫌でなければの話だけど」

「じゃあ、ぜひよろしく願います」

「そうか、じゃあさっそく色々としなきゃいけないね。あと一応今日で退院できるけど明日までいるかい？それとも今日からうちに来るかい？」

（ふむ、AMSのこともあるからな…もしこの人しか知らないなら他の職員の目にふれる前にいったほうがいいな）

「はい、じゃあよろしく願います」

「わかった、じゃあ準備が終わったらよびにくるよ」

そついい孝弘は部屋を出ていった

孝弘 side

僕は零治君の病室をでると妻が待っていてくれた。

「孝弘さん、あの子どうだった？」

と心配そうに聞いてくる

「ああ、零治君は目を覚まして元気だったよ。しかも養子にもなるって」

そう言うとき妻はほっとし、喜んでいた

「でも、首の機械のことは知ってみたいだったよ。そのことを聞くとほんの一瞬だけど動揺していたしね。どうやら彼は記憶を閉ざしてるんではなくて話したくないみたいだ。まあ、それもそうだと思うよ。推測だが首にあんなものを埋められたんだ、きつととても酷いことをされたんだろうね。」

僕がそう話すと妻の表情は暗くなる

「私たちじゃ、あの首の機械をとってあげることができないのよね……」

「ああ、あそこまで脊髄に近いとね、悔しいけど今の医療技術じゃ絶対に無理だろうね、正直どうやったらあんなことができるか知りたいぐらいだよ。まあなんにせよ、あんな子供にあれほどの非人道できないことをするなんて許せない」

僕はそういつてるといつの間にか爪が食い込むまでこぶしを握っていたらしく手から血が流れる。そうすると妻は僕の手をそつと握り「大丈夫ですよ。孝弘さんたとえ今、あの機械をとってあげられなくてもあの子に人並みの幸せを与えてあげることができるはずだから」

「ああ、そうだね」と静かにうなずいた

「それにしても由利香をずっと待たせてしまってるがどうしよう…」
「それなら大丈夫ですよ。さっき由利香に電話をしておきました。
ついでにもしかしたら家族が増えるかもしれないと言ってあげたら、
電話口ですごいはいはいでしたよ」
「それはよかった。君は零治君が断わらないとわかってたのかい？」
「ええ、それは一児の子を持つ母親の勘です！」
そう自信満々に言う妻を見て思わず笑みがこぼれた
「さて僕は、色々と手続きをしにいくよ」
そう言う僕と僕は廊下を歩いていった

side out

零治と孝弘の会話から数時間後、零治は孝弘とその妻、裕子とともに三島家に向かっていた

そして、三島家の前にきて孝弘が家の扉をあけ

「ただいまー」

と言うと奥のほうから足音が近づいてきて

「おかえりー！わたし、いい子にしてまっただよ！」

と元気よく走ってきた女の子を孝弘さんが

「えらいぞ、由利香！」

と言いながら頭を撫でる。どうやら女の子の名前は由利香というらしい。

「ほら、由利香。電話で言ってた新しく家族になる零治君よ。ちなみに由利香より1つ年上だからお兄さんね」

そう言い、裕子は零治を自分の娘に紹介する。

「わたしの名前は、由利香っていいですよ！」と元気よく挨拶をしてくる

「俺の名は、零治という。よろすしく」

「うん！よろしくね、れいじお兄ちゃん！」

と言うと勢いよく零治に抱きついてくる。それに対し零治は少し照れくさそうにする。

そんなやり取りを孝弘と裕子の2人はみて微笑んでいる。

そして零治もこれからこの温かい家庭がずっと続くと思っていた…
そう、あの事件が起こるまでは…

第8話（後書き）

いろいろとありえねえと思われませんがそこら辺はどうかご都合主義で通してください。

お願いします。

そして首輪付きやリリウムが入ってくるのはもう少し先になるかと思えます。

第9話（前書き）

今回からISにふれてきます！

そしてちょっとグロ（？）シーンのものがあったりなかったりします。

第9話

第9話

零治が三嶋家の養子になってから約2年がたちとある休日、家族皆で昼食をとっていた。

「れいじお兄ちゃん、ご飯食べ終わったら一緒に遊びにいこう！」と元氣よく言う由利香

「ああ、いいよ。ただし嫌いなトマトをちゃんと食べたらな」

「うう、がんばって食べるもん！」

「あらあら、すっかりお兄ちゃんね」

「由利香が人懐っこいのもあるしね」

二人がその光景を見ながら微笑む。

しかし突如家の外の町内放送から緊急の避難警報が鳴り響く。

「〇〇町の皆様にお知らせします。たった今、各国のミサイルが日本に向かって発射されました！直ちに外に出て政府の役人の非難にしたがってください！」

それを聞くと零治たちは、必要最低限のものを持って急いで外に出る。すると今の放送を聞いたであろう人々が慌てていた。それをスーツを着た政府の役人と思われる人たちが指示をだしている。

「さあ、早くいくよ！」

孝弘はそう言うのと零治の手をしっかりと握り、裕子は由利香の手をしっかりと握り役人の指示にしたがい移動し始める。

「れいじお兄ちゃん、いまなにがおっこてるの？」

不安そうに聞いてくる由利香に対し、あいてる左手で由利香のあいてる右手をしっかりと握り

「大丈夫だよ。父さんや母さん、俺もついてるからね」

そう優しく言う。すると遠くのほうから轟音がきこえる。おそらく

ミサイルが落ちたのだらう。そしてその轟音をきいた人々は、パニックに陥る。すると人の波が荒れて、零治たち家族を引き裂くかのように人に人がぶつかり、とうとう孝弘の左手を握っていた零治の右手が放れてしまい、由利香も裕子の右手を握っていた左手が放れてしまふ。

孝弘と裕子は同時に叫び、再び手を掴もうと伸ばす。しかし人波は残酷にも孝弘と裕子を飲み込んでいき見えなくなってしまう。すると近くの建物にミサイルが落ちてくるのが見える。そしてすさまじい爆発音とともに破壊された建物の破片と衝撃が襲いかかる。零治はその衝撃にうたれ意識を落としゆくなか、絶対にこの手だけは放さない、由利香の手をいつそう強く握った。

零治は氣を失ってから、1分程で氣がつく、そして意識が回復するとすぐに左手の手を握る感触に気づき多少安堵し自身の左手を見ると由利香の右手がありそのさきを確認すると……右手は腕の途中で切れていたそして先には建物の巨大な瓦礫があり下のほうには血が飛び散っていった。

しかし零治はすぐさま目の前の光景を理解できなかった、いや、理解したくなかった零治は必死に瞬きをする。何度も、何度も、何度も、何度も、しかし目の前の光景は変わることはなかった。すると必死に否定し続けてきた事実が頭の中に入ってくる。

「ああア ああアア ああアア ああ ああああ ああアア ああ ああアあ
ああアア ああああ ああ！」

零治は涙を流しながら叫び、こう思った

“たとえどんな世界だろうと、世界は常に残酷だ”

そう思うと零治は意識を手放した。

そして零治は気がつくともた病室のような場所にいた。

「ここは？」

そう言いうと近くの男性が零治が起きたことに気づいた

「ここは、どこですか？」

と男性に聞いてみる。

「ここは、昨日起きた“原因不明の爆発”によって独りになってしまった子供たちなどを保護する施設だよ」

そう男性が言ったのを聞くと零治はふと理解する。

ようするに日本政府や他の国の政府はミサイルは約一ヶ月前に発表されたISに約半数をそしてその他は各国の軍などが打ち落としたことになり。ミサイルが落ちた事を無かったことにしたのだ。そしてもしこのことを外に漏らそうとすれば消すであろうと、いわばこの施設は本当の真実を知る者の監視場所であるとそしてこの施設に日本各地で起きた“原因不明の爆発”による集められた被害者の人数はたった16人ほどである。そしてその16人は全員子供である子供ならあの事件のことを上手く言い包められると思ったためである。と零治は理解したのだ。

「少しでも無事な人がいてよかったよ。すまないが今忙しくてね、また後で来るよ」

と言い病室を出てた。すると零治は最後の光景を思い出し泣くかと思えたが涙がでてこなかった。

（ははっ、俺の心は本当に狂っているらしいな）

そう自分を嘲笑う。零治は前の世界で、戦争をしていて親しい仲間たちが次の瞬間には絶命してたりする状況に馴れてしまったために心の感覚が少々麻痺しており、とても悲しい気持ちだが泣けないという状態になってしまっている。しかしそれが皮肉にもそのおかげであんな光景をみても精神が崩壊せずにすんでいるのであった。

そして零治が施設に来てから約半年後、他の子供たちとともにとある部屋に集められていた。

「今日から君達は新しい施設に移動してもらうことになった。なので今から君達は外の車に乗って移動してもらう」

男はそう言い子供たちはみな中から外が見えないようになっていいる車に乗せられると出発する。そして車に乗ってから数分、いや数十分あるいはそれより長い時間かもしれない時間がたち車が止まる。するとドアが開き降ろされ目の前の建物を見ると研究所のようなところだった。

そして建物中から数人男が出ると子供たち全員を中に連れて行き、とある部屋に連れてくるとそこには眼鏡をかけた研究員のような薄気味悪い男がいて、子供が全員いるのを確認するとしゃべりはじめる。

「初めまして、僕は、ISの研究をしているキール・マルセスと言う。これから君達には被検体になってもらうよ。」

キールという男がそう言う子供たちは騒ぎ始め、それをみたキールが部屋の隅にいた一人の男に目で合図する。するとがたいのいい男が子供たちに近づき騒いでいる子供の中の一人を掴み見せしめのように殴る。すると子供たちは怯えて静かになった。

「うんうん、僕は静かな子は好きだよ」と薄気味悪く笑いながら言う。

「さて、まずは男の子と女の子に別れてね。そして男の子は僕についてくるように」

そういう子供たちは嫌だと思ったがその言葉に従わなかったらさっきの男の子のようになると思うと、零治と殴られた男の子を含め12人はついていった。そしてまた別の部屋に入るとまたキールが

喋りだす

「みんな最近TVとかで話題になっているISを知っているね？
だけどねそのISはなぜか女性にしか動かせないんだよ、現行の兵器を凌駕するのに女性しか動かせないなんてもったいないよね。」
しかし僕はね、どうにかして男性が動かせないかと考えているんだ。
そしてもし動かせるようになったら凄いいことなんだ。だからね、君達にはその為に協力をしてもらうんだ。」

クククツと気持ち悪く笑うキール

「ああ、そうだそうだ、君達には拒否権は無いからね？君達は哀れなことに国から捨てられちゃったんだから」
アハハと可笑しいように笑う。

（やつぱり、か。国は口封じのために変態科学者にモルモットとして渡したのか）

と零治は冷静に考えていた。すると笑い終わったキールが零治のこ

とみて
「そういや、そこにいる零治君だったかな？君面白いもの首につけてるよね？」

「っ！」

「どこの誰がそんなものをつけたのかわからないけど、僕はそれに興味があるんだ」

口の両端を上げてにやりと笑うキール

「ちよつと調べさせてもらうよ、大丈夫解剖は絶対もしないし丁寧に扱うから、乱暴に扱って貴重なサンプルが使い物にならなくなつたらいやだもん」

零治は近くにいた大柄の男二人に掴まれ抵抗するが体格差が違いすぎるためにあっさり押さえ込まれる。そして実験室のような場所につれてこられる。するとそこには組みかけのISと呼ばれるものがあった。

「来てそうそう悪いけどすぐに実験させてもらうよ。さっそくISを動かせるか試してみたいけどまずそれがどうなってるかを知り

たいからね」

そう言つと零治を台に固定して機械からいくつも伸びるコードの中の1つをAMSにとりつなげる。

「すこし苦しいかもしれないけど頑張つてね」

そう言つと零治はネクストを動かすためにつなげたときよりは軽い
が似たような精神負荷をうけ

「がつ！」と苦しそうにする。

「うーん、どうやら脳からの電気信号を首のそれで制御して機械とかに送りだすみたいだね。これは義手や義足のために使われるものだったのかな？それにしても精神負荷がかかるみたいだね。ねえねえ君はなんでこんなものをつけられたんだい？」

「知る、か！」

「そうか、残念だ。まあそれじゃあ仕方ないか、悪いけど君にはその首のものと似たようなものができるまで頑張ってもらつからよろしくね」

その日から零治は辛い実験の日々を繰り返す。

そして実験を始めてから約1ヶ月半後

「ねえねえ零治君、今日はねISを動かしてもらいたいんだ、君のね首と同じようなものがね試作品だけでもできたから、まずは君がISを動かせるか試してみたいんだ。もしかしたらいつもより精神に負荷がかかっちゃうかもしれないからがんばってね？」

そう言つと零治をISに乗せISから伸びるコードを首に刺す。すると精神負荷がかかり苦痛そうに表情を歪めた。するとISが起動したのだ。キールはそれを見て

「すごいよ、零治君！」

アハハと愉快そうに笑う

「本当に凄いよ君は！今、IS適正を見たけどA+だよ！さつそく他の子に取り付けてあげなきゃ」

そう言うときールはモニター室を飛び出していった。

そしてその日から零治は生身でもISでも戦闘訓練を強いられ、他の子供は擬似的AMSをつけられ精神負荷に耐えられるようにとされていった。そしてそこから1ヶ月ほどたった。

とある研究室で

「やっぱりすごいな、僕は！まあ大きさが首輪と同じぐらいになってしまったが、男性はISが使えるようになり元々IS適正のある女性は1〜2ランク上がるようになる」

と一人で興奮しだすキール

「うーん、でもまだ改良しなきゃな、残念なことに精神負荷に耐え切れなくなった子供たちがでちゃったし、あと2人しか使えないがないのはつらいな。だけど零治君はすごいね、あの精神負荷にずっと耐えてるんだから。」

そして急に立ち上がり

「あつ、そうだ！前に拾ってきたあのISみたいなのを零治君に動かしてもらおう！あの子なら僕らでもISっぽい何かとしかわからなかったあれを動かせるかもしれないしね、やっぱり僕は天才だ！」

そう言うとき実験室に向かっていった。

「零治君、君に動かしてもらいたいものがあるんだ」

そう言うとき零治の前にあるものが出された

「前にねそのISっぽいものを拾ったんだけどね僕ら研究員がどんなに頑張っても解析もできなくて女性にも触らせてみたけどまった

く反応しないんだ、外見からしておそらくISだと思うんだ。だから是非、君に動かせるかを試してもらいたいんだよ」

零治はそのISらしきものをみるとどこかで見た記憶があるのだ、そして少し考えるとふと思い出す。

（こいつは、まさか…）

零治は自分の勘が正しければ、自分はこのつを動かせるのではないかと。そう思うと零治はそのISらしきものにふれる。するとAMSをつなげてないのにISが起動した。すると機体の情報が零治に流れ込んでくる。

AC・NAME ファンタスマ
f a n t a s m a

HEAD・HD・HOGIRE

CORE・CR・HOGIRE

ARMS・03・AALIAH/A

LEGS・LG・LANCEL

R ARM UNIT・03・MOTORCOBRA

L ARM UNIT・07・MOONLIGHT

R BACK UNIT・EC・0307AB

L BACK UNIT・EC・0307AB

R HANGER UNIT・EB・0600

- COMPLETE SYSTEM CHECK -

システムチェック完了の情報まで流れ込み、それが終わる。

（どうやら、ネクストの出力をほぼ完璧に再現してある。そしてPAも機能するとは驚いた。だがPAは展開しないほうがいいな）
そう考えているとキールが

「マジKoolー！最高だよ零治君！」

などと五月蠅いが気にせず。ファンタズマのそれなりに情報をよみとると零治は研究員達の方へ向き右手の03 - MOTORCORAをガラス越しにいる研究員にむけて撃つがガラスは壊せなかった。「おやゝ？ 今までの恨みをはらそうとしてるのかい？ だけど残念だったねゝ、このガラスは対IS用のバリアがはってあるから無理だよ」

とケラケラ笑うが零治は左手の07 - MOONLIGHTを最高出力でガラスの目の前にいた他の研究員2人ごと焼き切ると、警報になる。そしていつも人を馬鹿にしたように笑っているキールが慌てていた。

「な、なんでIS用のバリアを壊せるんだ！？ クソッ！」

そう言うとき急に部屋をでて応援を呼ぶキールそれを逃がさないとして07 - MOONLIGHTで壁を壊していく。

「さて、今までの礼をたっぷりとさせてもらうぞ」

と言い研究員を殺害しながら追いかけると外に出た。

するとキールはへばっていき転んでしまう。そして零治は近づく

「貴様は、さんざん俺らのことを好き勝手にしてくれたな！」

「だから、どうした？ それで僕を殺して他のやつを救うってか？ だったら無理だな！ 他のやつらは精神負荷に耐えられなかったからな！ 残りの2人はちよつと手を加えてやってもう無理だ！」

ヒヤヒヤヒヤと狂ったように笑う。それを聞いて零治は

「五月蠅い」

と言いキールに対して03 - MOTORCORAを撃つと片足が吹き飛ぶ

「うがあああああああああああ！！」

僕の、僕の足があああああああああああ！！」
と言つてのた打ち回る

「もういい、貴様は今すぐ殺してやるっ…！」

そう言い03 - MOTORCORAをキールに向けると横から斬りかかれると零治は後ろに避け距離をとり、攻撃してきた相手を

見た。するとそこにはISをまとっているものが2人いた

「ははは！もうお前は終わりだあ！見る、さっき言っていた残りの2人だ！もう廃人確定の人形だよ！さあ、お前たちあいつを殺せ！」

そう言う2人は零治むかつて近接ブレードで切りかかってくる

「下種がつ！」

そう言いキールを睨みながら相手の攻撃を避ける。相手は素人同然の動きで力任せに振るうブレードは決して零治にあたらないだが零治は反撃をしないでいた。たとえ手遅れだとわかってても2人を手にかけたくないと思っている。すると2人からオープン・チャネルでしゃべってくる。

「オレタチハ、モウタスカラナイ」

「コレイジヨウハ、モウイヤダ」

「ダカラモウ、コロシテ」

それを聞くと零治は

「……わかった、そしてすまない。俺のことは恨んでくれて構わない」

そう言う07・MOONLIGHTで絶対防御を貫き2人を倒す。そして2人とも切られる前に「アリガトウ」と言い残した。そして再びキールの元へ近づくと

「クソツ！あの役立たずどもめ！」

そう言うキールに03・MOTORCOBRAをむけ

「死ね」

そう短く言い引き金を引いた。そして

「こんな場所はまだあるべきではない」

そう言う程度の高さまで上昇し、両背のEC・O307ABを高出力で研究所に向けて撃つと研究所を跡形もなくすべて吹き飛ばした。そして、静かに地上に下りるとファンタズマを解除すると左手に腕輪状になった。そして零治は今までの疲労のせい、膝をつき倒れてしまう。

すると遠くからヘリコプターや車の音が近づいてきて、ヘリコプターが近くに着陸して中から初老の男性が降り零治に近づいてくる。

そして零治はその姿をみながらゆっくりと意識を手放した。

第9話（後書き）

まあ、なんというか、ご都合主義まっしぐらなうえに無理やり感はんばないですがそこら辺はスルーをお願いします（汗

そしてもうすぐIS本編に入れそうです。
なので頑張らせていただきます！

第10話（前書き）

今回は短いと思います。

そして次から本格的に本編に介入する予定となっております。

第10話

第10話

とあるヘリコプターの中

零治はゆっくりと目を開け

「また気を失ったのか…」

と静かに呟く。それに気づいた初老の男性は

「おや？もう目を覚ますとは丈夫な子だな。私の名はルーカス・レイレナードという。一応外傷は無かったがどこか痛むところはあるかな？」

「いえ、大丈夫です。俺の名は三嶋 零治です。そして助けられて、ありがとうございます。」

「いや、礼を言うのはこちらだ。生きていてくれてありがとう。そして、すまない」

零治はむこうの急な感謝と謝罪にとまどった

「なぜ、そんなことを言うんですか？」

「実はあそこの研究所が非人道できな実験をしているのがほぼ確実にわかっていたんだが、決定的な証拠を入手できずに突入するこ
とができずにいてな。そして今日になってクラッキングでやっと入
手ができ急いで来てみたが、それは遅すぎた。結果、君の手を汚し
てしまい他の子供を誰一人として救うことができなかった」

「でも、国が関係していますから、仕方ないと思いますよ」

「それでもだ。少し無理してでも早く行くべきだった…すまない」

「いえ、少なくとも俺は許しますよ。なにはどうあれあなたが俺
の命の恩人ということに関しては変わらないんですから」

「ありがとう、優しいんだな君は。罪滅ぼしと言ってはなんだが、君を我が社で保護させてもらえないか？」

「保護、ですか？」

「まあ今の君の状況では、私が例えどんな理由を述べようと、君は私達があの研究員達のようにISが使える男性として利用すると思うのは承知だ。そのうえで君を保護させてもらいたい」

「確かにそうですね、ですけど俺は普通の生活に戻るのが難しい今、頼るしかないのが事実ですから」

「そんなことはない！君は普通に生活していいんだ、今からでも遅くは無いんだ！」

今まで冷静だったルーカスが急に声を大きくして言う。その光景を見て零治は思わず軽く笑ってしまう。

「やっぱり、あなたはいい人ですよ」

零治がそう言うのとルーカスは、はっと冷静に戻りと笑う

「ハッハッハッ！私もしてやられたな、こんな子供にのせられてしまったよ」

「では、これからよろしくお願いします」

「ああ、任せてくれ。一応君がISを動かせる事は我が社の職員全員で外部に漏らさないようにするがいいか？」

「そのかたちでお願いします」

そう話しているとヘリが着陸し外に出ると目の前には見覚えのあるマークが入ったでかい建物があった。

「見てくれこれが我が社、レイレナード社だ。そして、ようこそレイレナード社へ」

それを零治はみて啞然としていた。

（あれ？やっぱり名前を聞いたときから思ったけど、マークまで一緒とは驚きが隠せん）

「ん？どうした、そんなに驚いたか？」

そう言われはっと我にかえる

「え、ええ。あまりの大きさに驚いてたので」

「そうか、だがISが発表されてから業績が落ちてきてな」

「俺も手伝いますよ？」

「ハッハッハッ！気持ちだけ受け取っておこう。ではついて来てくれ」

そういい歩き出すルーカス、そしてその後に零治はついていった。

こうして零治はレイレナード社に入社（？）したのである。

そして、あれから3ヶ月ほどたち零治は社内の人々から可愛がられていた。零治もまんざらではないがどうしても手伝いと思っていた。しかし社内の皆はあの実験の被害者だからと気遣いIS関連の仕事は手伝わせないようにしていた。だが零治からすると恩返しができないのがもどかしかった。そこで零治はルーカスに仕事をどうしても手伝いたいとしつこく頼み込むと、とうとうルーカスは折れてしまい無茶はしないようにと条件付で承諾を出した。

すると零治は自身のISファンタズマを調べることにした、さすがにコジマが害があるかないかはISのみの情報では判断がつかず、精密に調べると、どうやらコジマ粒子は害をなさないようになっていた。そしてブースターやPAはネクストと同じ出力であり背中のEC-O307ABも数値をみるとネクストのとき（Ver・フロムマジック）と変わらずAAも同じだった。アサルト・アーマー

武器のほうは両腕に07-MOONLIGHTを装備した状態で持てるようになっていた。

そして格納されてる武装は32個と多いのである。これはあまりにも危険だろうと思い、PA、AA、ブースター、EC-O307AB、07-MOONLIGHTの出力には制限をかけたのであった。

た。

そして零治はまず開発から手伝おうと思うと、零治は向こうでの知識をある程度使いいろいろと助言をしていく。しかし皆、最初は子供の戯言だと思っていたがその有用性がわかれると驚き零治の助言とともに一緒に開発していった。そして零治がレイレナード社で手伝うようになってから徐々に業績が伸び始めたのである。

それから時はたち、零治が高校1年になるころに前から患っていた持病にルーカスが倒れてしまう。それを聞き急いで病院に向かう零治

「爺さん大丈夫か!？」

「ああ、零治か。学校はどうした？」

「爺さんが心配だから早退してきたさ。で、医者は何んだって？」

「病の進行が思ったよりも早くてもう、長くないと言ってた。長くもって一ヶ月だそうだ」

「…そうか」

「なに、私もうすうす感じてたことだ。それにしても改めて見ると随分と大きくなったなあ」

「あれから何年たつてると思ってたんだ？」

と笑いながら言う

「そうだったなあ。なあ、ところで零治」

「ん？なんだい爺さん」

「お前、次の社長を任せていいか？」

「はあ!？なに言ってるんだよ爺さん、俺なんかよりユーリ力さんとか大介さんとかいるだろ？」

「ああ、その2人にも社長にならんかと聞いたら零治を指名した

ぞ、他の社員たちにも聞いたら皆お前さんがいいって言うてたぞ。因みに私もそれを望んでるぞ」

「みんな、買いかぶりすぎだよ、俺のこと」

その言葉をルーカスは聞くと大きな溜息をつく

「はあ、お前は自分のことを過小評価しすぎだ。もっと自身を持って、お前にはそれに見合うだけの能力があるのだから。まあ死にそうな年寄りの最後の我俣を聞いてはくれんかね？」

それを聞くと零治は拳を強く握り。

「わかったよ、爺さん。だけど爺さんには悪いが、あと1年程待ってくれ。俺はその間にもっとがんばるから、それじゃ駄目か？」

「ああ、それで構わない。こんな年寄りの我俣を押し付けてすまん」

「気にしないでくれ、爺さん」

そのあと零治とルーカスは他愛のない話をして一日をすごしていった。

そして、その日から一週間と数日たつとルーカスはとうとう帰らぬ人となった。

零治は涙を静かに流し見送る。そして自身が言った言葉を果たすために努力をするのであった。

時は過ぎ、翌年の2月、世界中を騒がせる出来事が起きる。

“ 男性初のIS操縦者が表れる ”

第10話（後書き）

やっとIS本編の一手手前です。

そして終わり方が微妙なのもいつものこと、ということでお願いします（汗）

今回もいろいろと都合主義でおしてます。

一応、零治のISの武装は設定などでだすことにします。

あと因みにでてきたレイレナード社の皆さんはとても心が綺麗な人達なのでご安心してください。

どのくらい綺麗かと言うと、アクアビットの研究員達が「コジマなんて害のあるものを使ってはいけないんだ!」と言うくらい綺麗です。

そして次も頑張っていきたいと思います。

誰も得しない主人公設定的な何か（前書き）

一応、本編突入前なので主人公設定的な

誰も得しない主人公設定的な何か

誰も得しない主人公設定的ななにか

名前：三嶋（久瀬） 零治

原作開始時は高校2年

背の高さは185ぐらい

IS名：ファンタズマ

形みたなの

HEAD・HD・HOGIRE

CORE・CR・HOGIRE

ARMS・03・AAL IYAH/A

LEGS・LG・LANCEL

R BACK UNIT・EC・O307AB

L BACK UNIT・EC・O307AB

をフルスキンではなく都合よくハーフスキンにしたもの

機体武装

ライフル

051ANNR×2

アサルトライフル

063ANNAR×2

MR-R102×2

04 - MARVE × 2

スナイパーライフル

050 ANSWR

061 ABSR

マシンガン

XMG - A030 × 2

03 - MOTORCOBRA × 2

ガトリングガン

GANO1 - SS - WG × 2

ショットガン

MBURUCUYA × 2

SAMPAGUITA × 2

ハンドガン

LARE × 2

グレネード

GRA - TRAVERS × 2

レールガン

RG01 - PITONE

レーザーライフル

ER - O705

ハイレーザーライフル

HLR01 - CANOPUS

HLR09 - BECRUX

パルスガン

EG - O703 × 2

ブレード

KIKU × 2

レーザーブレード

07 - MOONLIGHT × 2

あと天使砲（フロムマジック使用）

他、首輪付きのとかもそのうち追加予定

誰も得しない主人公設定的な何か（後書き）

ぶっちゃけ形はビジュアル使用なのでゲームで参考にしないほうがいいと思います。（汗

そして天使砲の威力はフロムマジックと同じって考えるとんでもないきが…

あと機体性能は超スペックということでお願いします。

第11話（前書き）

やっと本編突入です。
長かった、なあ。

そういえばほどうでもいいことですがアサルトライフルやライフルの連射速度もフロムマジックでOPと同じというのを忘れてました。

第11話

第11話

IS学園の1年1組の教室で真ん中の最前列に織斑一夏という男子が座っている。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRをはじめますよー」

そう言うのは子供が大人の服を無理に着ましたという印象の女性、山田麻耶先生である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

しかし教室内は変な緊張感から生徒の反応が誰一人として無い。それに対して山田先生はちよつとうろたえてしまう。

「じゃ、じゃあ自己紹介を出席番号順でお願いします」

と言い自己紹介が始まっていく。そんな中、織斑一夏は別のことを考えていた。

（これは…想像以上にきつい…）

と考えていた。それもそのはず、クラスの殆どが女子であるために数少ない男子にみな注目しているのだ。そして一夏はちらりと窓側の女子、六年ぶりの再会である幼馴染の篠ノ乃箒の方へ助けを求めようにして目をやるが、ふいつと窓の外に顔をそらした。

（うう、薄情な…）

そう思い他に助けを求めようとしてもあといるのは、後ろにいる男子生徒だけであるが、今の状況では後ろに振り向くことはできなくて悩んでいると

「……………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

いきなり大声で呼ばれて声が裏返ってしまった。周りからはくすくすと笑い声をする。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってご、ごめんね。お、怒ってる？ゴメンね、ゴメンね！でも、あのね、自己紹介、“あ”から始まって今“お”の織斑くんなんだよね。じ、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？や、約束ですよ。絶対ですよ！」
そう聞くと一夏はしっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ…)

「えつと……お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言うのと周りの生徒からは、それだけで終わり？もつと色々と喋ってよ！などという期待の視線がつきささる。すると一夏は決心したように深呼吸して思い切って口にした。

「以上です」

そう言うのがたつとずっとけてしまう女子が何人かいた。するとパアンツ！後ろからいきなり叩かれおそるおそる後ろを振り向いてみると、とある人物が目に入り。

「げえつ、関羽！？」

と言うとパアンツ！とまた叩かれる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

一夏の頭を叩きそう言う人物は織斑千冬である。

「山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえ副担任ですから、これくらいはしないと……」

山田先生はそう言いさっきの涙声とは変わり笑顔でこたえた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬がそう言う

「キャーーーーー！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に会うために沖縄から来ました！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

などと黄色い声援が響く

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。で？挨拶も満足にできるのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は——」パンツッ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「よし、他のものも静かにしろ。次のやつ自己紹介をしろ」
そう言うで一夏の後ろの男子が立ち上がる。

side 首輪付き

どうも、全く出番がなかった首輪付きです。え？あの後どうなったかって？それはまた今度話すとして、俺は約一ヶ月前にこの世界に来て右左もわからず途方に暮れて2日ほど過ごしてたらとうとう空腹で倒れたんだ。そのところを織斑千冬に助けてもらい、なんか俺の手首についてるアクセサリーがISというものらしく俺はそれを使えるがためにここににいるわけだ。もちろん自分の素性のことは殆ど隠して首の後ろのAMSのことを利用して実験施設から逃げてきたことにした。そしてなんか織斑千冬が根回ししてくれたみたいで政府のほうに正式に登録された。

それにしても周りの声がでかすぎるだろ。お、そう思ってたら自己紹介の番が回ってきたみたいだな。

「あー、俺の名はオルカ・リンクスだ。一応ISを使える三人目の男子だ。テレビに出てないけど、政府の方にはちゃんと登録してあるからよろしく。趣味は特に無い。まあ、そんなもんで」と俺が言つと周りがまた騒ぎ始める。あゝめんどくさかった。え？名前が安直すぎる？・hackのオルカもといヤスヒコとユニコーンのバナージの名前を馬鹿にするなよ？

パンツ！

「いつ！」

「お前もまともに自己紹介ができんのか？」

「…すみません」

なぜあの自己紹介ではいけなかったのだろう…

side out

そして自己紹介が進み一人の女子にあたる

sideとある女子

私の名前はリリウム・シェリーと言います。珍しいことに私は生まれたときから前世の記憶があります。名前のリリウムは一緒ですがファミリネームは変わりました。そして前世の世界は戦争が当たり前の世界でした。そしてあの人も死んでしまった悲しい記憶もあります…と暗い話は無しにしましょう。前世のことはいつか語るとします。で、あのオルカ・リンクスと名乗った男子は前世のストレイドのリンクスに瓜二つですね、もしかしてあの人もそうなんでしょうか？後で話してみましよう。それにしてもあの出席簿とても痛そう…私は叩かれないように気をつけなきゃ。あ、どうやら私の番のようですね。

「私の名前はリリウム・シェリーです。趣味は読書で、好きな食

ベ物はスイーツ全般です。日本にはつい最近来たばかりなので色々教えてもらえると嬉しいですよ。一年間よろしくお願いします」
そう私が言い終わり次々と進み全員の自己紹介がちょうど終わると教室のドアが開き制服をきた男子が入ってきました。それは約一週間前にテレビに出てきて、そして私の前世の記憶でとても見覚えのある人でした。

side out

一組の自己紹介が終わると教室のドアが開く、すると男子生徒が入ってくる。

「遅れてすみません、織斑先生」

「大丈夫だ、事前に連絡はもらってある」

「そうですか。ならよかったです」

「ちょうどいい、お前も自己紹介しろ」

「わかりました。」

そう言う男子生徒はクラス皆の方を向いた

side 零治

俺は織斑一夏がISを使えると発表したのを見てから、約2週間後、3月の初めに政府のほうへISが使えることを報告した。そして俺がレイレナード社の社長へと就任すると同時に発表して欲しいと頼み約一週間前に発表された。そして入学式当日、俺はIS学園の

理事長室で少し話をしたためにSHRに遅れてしまい、最後のほうに来了。どうやら自己紹介が行われているみたいだな、では入らせてもらおう。

そしてドアを開けたて織斑先生に謝罪などを言うと言いつつ自己紹介をすることになった。なので真ん中のほうに行きクラスメイトを見渡すと、向こうの世界で見覚えがあるのが2人ほどいて驚いた。そして2人のほうを見ると、向こうも驚いていた。どうやら十中八九あたりだろう。そう思うと自己紹介を始める。

「始めまして、多分テレビや新聞をみて知っている人はいるだろう。俺の名は三島零治で本当は今年で高校二年になるんだがあまり気にしないで接してくれると助かる。趣味は特に決まったものは無いが暇なときは読書をしている。もし質問があるなら後で聞いてくれ。一年間よろしく頼む」

そう言い終わると

「キヤー！うちのクラスに男子が三人も、さらにみんなイケメン！」

「そして年上キター！」

「神様ありがとう！」

なぜこんな騒ぐんだ？俺の自己紹介に変なところでもあっただろうか？

まあいいか、とりあえず後で見覚えのあるやつには接触を試みるか

side out

零治は自己紹介が終わり一夏の左隣の席に着くがクラスはずっと騒いでいる。するとチャイムが鳴った。

「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事しろ」

そして一時間目が終わり、休み時間

一夏は近くの男子2人に話しかけていた

「な、なあ」

「「ん?」「」」

「い、いや、男子が俺たちしかいないから仲良くしようぜって思ってる」

「ああ、そういうばそうだったな。改めて自己紹介させてもらうが、三嶋零治だ年上だとか関係なく接してもらえると助かる。呼び方は好きに呼んでくれ」

「あ、俺の名はオルカ・リンクスだ。オルカでもリンクスでも好きなほうでよろしく」

「おう。俺は織斑一夏だ一夏って呼んでくれ。零治、オルカ」

そう話していると

「「「ちよつといいか」」」

と箒が話しかけてくる

「「「ん?」「」」」

「誰かに用か?」

「ああ、ちよつとそこの」

と言いながら一夏の方をみる箒

「一夏、どうやらご指名のようだ」

「おう、悪いちよつといつてくる」

そう言つと一夏は箒とともに教室からでていく

(ふむ、では俺も聞いてみるかな)

そう思つと零治はオルカに聞こえる程度に小さく

「首輪付き、リンクス」

そう、ぼそつと呟くとオル力は

「！やつぱり、あんたか」

一瞬驚くと納得したようであった

「久しいな、首輪付き。それにしてもその名は安直すぎやしないか？」

「とつさに思い浮かんだ名前がこれだったから仕方ないだろう。ていうかあんたの名はどうなんだよ」

「俺は苗字は違うが零治というのは本名だぞ。因みにお前はいつごろこつちに来たんだ？」

「一ヶ月ぐらい前かな、あんたは？」

「もう十二年ぐらいかな？」

「12年前！？随分早いな」

「そうでもないさ、で話は変わるがあの後どうなった？」

「成功したよ……」

その言葉を聞くと零治は

「そうか」

と納得したように短く言った。するとチャイムが鳴り一夏達が帰ってくる。

「まあ、つもる話はまた後にしよう」

「ああ、そうするか」

こうして一時間目の休み時間は終わる。

一方リリウムのほうは聞きに行こうかどうかとうしようかと悩んでいた。いつの間にか終わりのチャイムが鳴ってしまっていたのであった。

（うう、次の休み時間は必ず聞いてみせます！）

と心の中でガッツポーズをとるのであった。

そして二時間目の途中

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

と山田先生が訊いてきた

「あ、えっと…」

「わからないところがあつたあら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

と胸を張りそう言うで一夏が元気に

「先生！」

と言い、山田先生も

「はい、織斑くん！」

とやる気に満ちた返事で返す。

「ほとんど全部わかりません」

「え…。ぜ、全部、ですか…？」

「…織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

と言うとオルカが

「ハハハッ！古い、古い電話帳と、間違えて」

と一夏のこたえがつぼつたらしく笑う。すると

パアンッ！パアンッ！

と一夏とオルカの頭に出席簿が落ちる。

「リンクス静かにしろ。そして織斑、必読と書いてあつただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと…」

「やれと言っている」

「…はい。やります」

そしてなんとか授業は進み二時間目の休み時間

「ちよつとよろしくて？」

と金髪の女子が偉そうなたいどで話しかけてくるが一夏たちは気に

せず話している

「ちよつと」

そうまた話しかけるが一夏（一夏は本当に気づいていない）達は話している。

とうとう我慢できなくなったのか、金髪は机をたたき

「無視しないでくださります？」

と言ってきたそれに対し

「へ？」と一夏は言い

「はあ…」と零治は溜息をつく。そしてオル力は

「やれやれ、空気にもなれんか」と言う

すると目の前の金髪はわざとらしく声をあげる。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのに、なんなんですよその態度？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

（貴族の務めか、レオハルトやジェラルドのほうがましだったな）

「代表候補生ってなに？」

それを聞いて零治が説明する。

「はあ、一夏。読んで字の如く国家代表の候補生だ。まあエリートみたいなものだ」

そう言うときセシリアはずっこけそうになっていた体を持ち直し

「そう！エリートなのですわ！」

びしつと指をさして言い、続けて

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスが同じなだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「「そうか。それはラッキーだ」」」

「…あなたたち、馬鹿にしていますの？」

（（お前が幸運だつて言っただんじゃないか））

と見事に三人とも息がぴつたりになった瞬間である。

「まったくあなた達は男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい期待していたのに、まったくもって期待はずれですね」

「俺に期待されても困るんだが」

「確かに一夏に期待するのは間違っているな」

とオルカが言い

「まあ、参考書を古い電話帳と間違えて捨てるぐらいだからな」と零治も言う

「お前ら！そんな馬鹿にしないでいいじゃないか！」

そんなコントみたいなことをしているとセシリアが咳払いをし

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

（こんなやつの優しさを貰うんだつたらバファリンの半分を貰ったほうがずっといいよな）

とオルカはくだらないことを考えている。

「ISのことであれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試では唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから」

「入試つて、あれか？ISを動かして戦うやつなら俺も倒したぞ、教官」と一夏

「ああ、あれか？俺も倒したなあ」とオルカ

「残念ながら俺は無かったぞ」と零治

三人がそう言うと、セシリアは驚いている

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子だけではっておちじゃないのか？」

そう言々とセシリアからはピシツと亀裂の入るような音がした

「あなた！あなたがた2人も教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「一夏、たぶんって？」

「いや、だから、たぶん倒した」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けて。な？」

「これが落ち着いていられ——」

とそこで三時間目のチャイムが鳴る

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

というセシリアの言葉に対して零治たちは

（（これは、面倒なことになった）（）

と黙っていた。

一方リリウムは

（うう、今度こそはと思ったのに、セシリア・オルコットって言う人に先を越されて話せなかったです……）

と机の上になだれていたのだった。

第11話（後書き）

やっと本編に入ったんですがたぶんこれからリアルの用事が忙しくなり更新速度が落ちてくるかもしれません。本当に申し訳ないです。

一応、はやめに投稿していくつもりでいるので、どうぞよろしくお願ひします。 m (_ _) ;) m

第12話（前書き）

今回も頑張ったお！

ていうわけでどうぞ

第12話

第12話

三時間目の授業

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と一、二時間目とは変わり、千冬が教壇で説明しようとしている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

そう、ふと思いついたかのように千冬が言い、さらに

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな」

と簡単な説明を付け加える。すると女子数名が

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

と一夏を推薦する。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

そう千冬が言っていると

「お、俺！？」

一夏がつい立ち上がってしまう。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな——」

そう一夏が言いかけるが千冬の

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無

い」

という言葉にはつきり切られてしまう。すると一夏は苦し紛れに

「じゃあ、オルカを推薦します！」

と言った。それを聞きオルカは

「まで、一夏。おれを巻き込むな！俺はやらんぞ！」

思わず立ち上がりそう言うが

「リンクス。邪魔だ、席に着け。それと拒否権は無いと言ったはずだ」

と一蹴されてしまう。するとオルカは零治のほうを見るとニヤリと笑い

「じゃあ、零治を推薦します！」

そう発言するのであったが零治は依然として涼しい顔をしている。

「他にはいないか？いないならこの三人の中から選ぶぞ」

千冬がそう言う。セシリアが机をバンツと机をたたき立ち上がる

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

というのを聞いて

（ほう、よくまあ、あの歳であんだけ長いセリフを咬まずに喋れるな）

と内容のほうは興味無しの戯言と思い別のところを感心する零治。

「一夏。お前、猿だつてよ」

「いやいや、オルカのことだろ？」

とオルカと一夏はヒソヒソ話す。

そしてセシリアはさらに言葉を続けて

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそ

れはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で―」
そこでカチンというような音がすると

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

と一夏が頭にきて思わず反論してしまう。

「なっ……!？」

と、セシリアは顔を真っ赤にして怒っている。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの!？」
そう言うセシリアにたいして零治は軽く溜め息をつき

「はあ、先に日本は文化として後進的などと言って侮辱してきたのはそちらのほうではないか？それなのに自分だけが被害者面とは、まったくもって情けないな。代表候補生の名がきいてあきれる」
そう言い肩をすくめる。するとセシリアはわなわなと肩を震わせ

「決闘ですわ!」

と言い机をパンツと叩くセシリア。

（言い返せなくなったからってそれは無いんじゃない?）と思うオルカ。

（やれやれ、上手くいかなくなると暴力で解決しようなどとは情けない。まあ、力づくでやるならこちらと同じやり方でやらせてもらうだけだか）と思う零治。

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」と意気込む一夏。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

そう言い敵意をむけた目で睨むセシリアを見て一夏は

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」と言う

「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですね！」と威張るセシリア。

「ハンデはどのくらいつける？」

一夏は男が本気で女子と力比べしたらまずいだろうと思いつくそう聞くが

「あら、早速お願いかしら？」

とセシリアは嘲笑うかのように言った。

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

そう言うところからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんたちは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

「しかも、もし男女間で戦争が起きたら男性陣は三日と持たないと言われてるんだよ」

と、みんな本気で笑っている。すると零治が口をゆっくり開く

「やれやれ、女性もISが使えて強から偉いとは、くだらんな。

男女間で戦争をしたら確実に負ける？確かに、戦力だけでみれば負けるだろう。まあ、第一に貴様らは戦争と言うもの勘違いしてると思うな。戦争と言うのは、ただ正面からどうとうとぶつかり合うような、おままことではない。その君」

と言い、適当な女子を指差し

「君に守りたい家族や友人、親しいものはいるか？」
そう問うと

「は、はい。います」

「では、君が国家代表やトップレベルの实力をもつ専用気持ちのIS操縦者でしょう。だが、もしも君の守りたい人が男性陣に人質としてとられ、助けるには女性陣と敵対して殺さなきゃいけないと

言われたら君は女性陣の勝利のために人質を見捨てるかな？」

「そ、それは…」

と零治の問いに答えることができない女子に構わず喋りだす

「そして戦争というのは、人質をとったり暗殺など当たり前だ、とくに死に物狂いでもがくやつらは、どんなことをするかすらわからない。そして君たちは誰一人として死なずに戦争が終わるとでも思ってるのか？」

そう言う別的女子が

「でも、ISの力をもつてすればできるんじゃない
と言ってくる。しかし零治はさらに問いかける

「いや無理だな、それはほぼ絶対といっていいほどありえない。
戦争は始まったら死人がでる。たとえ戦地にいなくてもな。そして
君たちは最前線にたったとき目の前の相手を殺せるか？」
それを聞くと皆黙ってしまう。

「人類は古来から今日まで多くの戦争があつた。そしてその戦場に立つものは相手を殺し、殺した者の家族や親しい者から死ぬまで恨まれ続ける。たとえ自分は直接手を掛けてなくてもそんな言い訳は通用しない。殺された側の人間は殺した側全員を同じように恨むだろう。そして君たちは殺した側にたったとき、それを背負えるのか？戦争と言うのはそういうものだ」

そう言うクラスの皆は少し想像したのだろうか、さっきまでの笑っていた雰囲気が消えていて、零治の話に集中している。

「そして現在の女尊男卑は今まで男尊女卑の時代を続けた愚か者のしっぺ返しだろう、だが女尊男卑を男尊女卑の時のようにくだらない理由でこのまま続ければ、やがて人類は壊死するだろうな…
つとすまない。話が随分と脱線してしまったな。まあ、今までの頭の片隅にでも置いてくればいい。だが、君たちが使うISと言うのは条約で禁止されているが、普通に人を殺してしまう“兵

器”だ。たとえ物を切るためのカッターだって使うやつが使えば、人殺しの道具になる。つまりISはそういうことなんだ。君たちには、それだけは覚えておいて欲しい。長々すまなかつたな」

そう言うとしばしの沈黙が流れる。そしてその沈黙の中、千冬がきりだす。

「三嶋の言うとおり、ISはあくまでも“兵器”だそのことはしつかり覚えて置け。さて話がうやむやになりそうだったから戻すが、クラス代表の件は織斑、リンクス、三嶋、オルコットの四人で一週間後の月曜。放課後第三アリーナで行う。四人はそれぞれ準備して置くように。それでは授業を始める」

ぱんと手を打って千冬が説明を始めていき三時間目の授業が終わり。休み時間は先ほど一夏たちを馬鹿にしていた女子達が馬鹿にしてすまないなどと。謝罪をしてきたりしていたが一夏やオルカは「別に気にしてないから大丈夫」などと言い零治も「さっきのことを少しでも理解してくれば構わない」などと言っていた。

そして四時間目の授業も無事に終わり。昼休みの時間

「零治、オルカ、飯を食べに行こうぜ」
と誘ってくる一夏。

「そうするか」
とオルカが言っていると、リリウムが近づいてきて零治に話しかける。

「あの、三嶋零治さん。ちょっと話をしたいんですがいいですか？」

それを聞くと零治は承諾し、一夏達には

「悪いな、一夏。先に行って食べてくれ」

と言って、リリウムについて行く。そして零治は屋上に来た。そし

て零治が喋りだそうとするトリリウムが

「いきなりすみません。あの、トリリウム・ウォルコットと言う人は知っていますか？」

とおそろおそろ訊いてくる。

「ああ、知っているよ。俺が昔に買い物の途中に転んでチンピラに絡まれたところを助けて百合の花の髪飾りをあげた子の名前だったな、そのとき俺はレイジ・クゼという名前だったかな」

と零治が言つとトリリウムは少し涙目になり訊いてくる

「やっぱり、あのレイジさんなんですよね？」

「そうだ、久しぶりだな。トリリウム」

と答えるとトリリウムは零治の胸に飛び込み涙を流す。

「また、会えてよかったです。あのとき、あなたが死んで、とても辛かったです！」

そう言いながら零治の制服をぎゅっと掴み喋る

「本当に、本当に辛かったです」

「悪いな」

と静かに言いながら軽く頭を撫でる零治。そして少ししてトリリウムは落ち着くと顔を上げると

グウと空腹の音がした。するとトリリウムが顔を真っ赤にしてあたふたし始める。

「い、いえ、こ、これはその、あれでして」

身振り手振りして何か言おうとしてるのを見て

「飯を食べにいくか」

そう微笑みながら言つと

「ううゝ、はい…」

と顔を真っ赤にしたままで軽く俯き答える

「じゃあ、一夏達の所へいくか」

零治がそう言つと

「えっ？2人でじゃないんですか!？」

と驚くトリリウム

「ん？ご飯は皆で食べたほうが美味しいぞ？」

そうさも当たり前のように零治は言うのにたいしてリリウムは零治の脛をゴツツ！と蹴る

「っ！ど、どうして蹴るんだ？」

とあまりの痛さに脛を押さえるしかしリリウムがなぜ怒っているかわからない零治

「さあ、知りません」

そう言いそっぽ向いてしまいうりりウム。

（まさか、まさかここまで鈍感だったとは…）

と怒る反面シヨックをうけるリリウムであった。

そしてこのあと零治は何とかリリウムを説得し、一夏たちとともに昼食をとったのであった。

「ぐぬぬ…」

放課後、そう言いながら机の上にぐったりとうなだれる一夏。となりをチラッとみると余裕の表情のオルカ

「ほら、どうした」

と片手に参考書を持ちながら喋る零治。

「い、意味がわからん…」

そう一夏が頭を抱えていると

「ああ、織斑くんたち、まだ教室にいたんですね。よかったです」

「…はい？」

三人とも呼ばれて声がしたほうへ顔を向けると山田先生がいた

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って三人に番号が書いてある紙とキーを渡す。

「えつと、俺の部屋は決まっていなかったんですか？前の話だと一週間は自宅通学してもらおうと言う話でしたけど」

と一夏が言うと、零治が

「一夏、そんなことしてたら誘拐されるぞ」
肩を軽くすくめそう言う

「あゝなるほど」

と納得する一夏。すると山田先生が説明しだす。

「えっと、まあ、そういうことなので政府特命もあつて寮に入れるのを優先したみたいです。一ヶ月もすれば三人とも個室の方が用意できますので、それまでは相部屋で我慢してください」

「あの、部屋はわかったんですけど、荷物のほうは一回家に帰らないと準備できな——」

「荷物のことなら、私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

と、一夏の言葉をさえぎり千冬が言った。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。因みに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんたちは今のところ使えません」

そう山田先生が説明すると

「え、なんでですか？」

一夏がそう聞き、不思議そうにしているとオルカが

「一夏、年代の女子と混浴したい気持ちはわかるが、我慢しろ」と一夏の肩をポンポンと叩きながら言うてくる

「お、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だ、駄目ですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

山田先生の質問に慌てて答える一夏

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それは問題のような…」

そして山田先生がそう言うと、廊下で女子達が

「織斑くん男にしか興味ないのかしら…？」

「それはそれで…いいわね」

「まさか、オルカくんか三嶋くん…！？」

「オル×織、いや三×織、逆もありかも！」

「三嶋くん、オルカくん、織斑くんの三角関係」

「それだ！」

「中学時代の交友関係を洗って！　すぐに！　明後日までには裏づけとって！」

などと騒いでいる。そしてオルカと三嶋は

「ま、まさか伝説のゲイヴンがここにいるとは…」

そう言い一夏の肩に乗せてた手をすぐさま放して距離をとり尻を押さえるオルカ

「人の恋愛の価値観は自由だからいいんじゃないか？」

と先ほどの位置よりも２メートルほど離れたところで言う零治

「ち、違っって俺はノーマルだ！」

そんなやり取りをみて山田先生は

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで失礼しますね。織斑くんたち、道草をせずにちゃんと寮に帰るんですよ」

そう言々と千冬と共に教室を出て行くのを見ると零治たちも部屋へ向うことにした。

「えーと、1025か。オルカと零治の部屋は何号室だ？」

「1026で一夏の隣だな」と言う零治

「あつ、俺も1026だぞ」と続けるオルカ

「いいな、俺も一緒の部屋になりたかったな」

一夏がそう言うと

「俺の尻が危なくなるからやだな」

とオルカと零治が同時に言う

「だから違うつて！そういう意味じゃねえよ！」

三人はそんなやり取りをしているといつの間にか部屋の前に来ていた。

「おつ、1025はここか。じゃあ俺はここだから、また後でな。夕飯のときに誘いに行くよ」

「ああ、わかった待っている」

零治はそう言いオルカと共に自分の部屋へ入っていきしばらくすると隣でもものすごい音がする。そして零治たちのところに夕飯を誘いに一夏が来てドアを開けるとボロボロの姿の一夏がいた。そして夕飯はリリウムも呼び零治、オルカ、リリウム、一夏、箒の5人であり、こうして一日が終わる。

そして翌日の放課後

「頼む、零治、オルカ。俺にISの使い方を教えてくれ！」

と一夏が零治、オルカ、リリウムの三人で話をしているところに助けを求めるように言ってくる。

どうやら凶暴な幼馴染と剣道をやって腕が落ちているから鍛えなおすと言われ命の危険を感じ取り零治たちのところに逃げ込んできたのである。零治は若干同情するが

「悪いな、教えてもいいんだが、クラス代表戦の後じゃなきゃ手の内を明かすことになってしまっからな」と丁重に断る零治

「そ、そんなあ……」

ガクツとうなだれる一夏。すると後ろから

「一夏、情けないぞ」

と言いながら追いかけてきた箒。

「一夏さん、いきなりISの操縦をするのも大切ですが、生身で鍛えておくのも大切なことですよ」

とリリウムが一夏を説得する。

「まあ、確かにいきなり専門外のことを付け焼刃でやるよりも、そっちのほうがいいかもしれないぞ？」

と付け加えるオルカ

「だから、せっかく幼馴染の箒さんが手伝ってくれるなら力を借りるべきです」

そうリリウムが言うと

「そうだな。みんなが、そういうなら頑張ってみるよ」

とやる気になった一夏。それをみてリリウムは箒に目で軽く合図を送ると箒はコクツと頷き一夏と剣道場に戻っていった。

そして零治はリリウムに少し手伝ってもらい、オルカは個人で訓練していった。

翌週の月曜。クラス代表決定戦

「——なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

一夏は箒と特訓していたがISのことを教えるのをすっかり忘れてしまっていた。それについていろいろと2人で話していると一夏

のISが届く。そしてさっそく装着しピットゲートに進む。

「行ってくる」

そう一夏が、箒、零治、オルカ、リリウムの方に向けて言うと

「あゝああ。勝ってこい」

「一夏、お前の可能性をみせてみる」

「ま、気張れよ」

「頑張ってください」

と上から順に箒、零治、オルカ、リリウムの順に言うと、一夏はセシリアの方へ向かっていった。すると零治とオルカは第三アリーナのAピットから出て行こうとする。

「零治さん、オルカさん。どこに行くんですか？」

とリリウムが聞いてくる。

「いや、相手の手の内がわからないほうが楽しいかと思ってな」

と零治

「俺も同じ理由だ」とオルカ

2人はそう言うとAピットから出て行った。

30分ちよつと時間がたち。一夏対セシリアの戦いが終わった。結果は一夏がギリギリのところで負けである。

そして15分後に零治対セシリアの試合が行われることになっているので零治は再びAピットに来た。

「一夏、お疲れ。次は俺だな」

「ああ、零治も頑張れよ」

そして開始5分前

「では装着するか」

零治は自身のISを呼ぶ。

「来い、フアントズマ」

すると零治を一瞬光が包むとその姿を現した

「す、すげえ」

一夏が驚いて言うと

「ああ、まるで天使みたいだな」

そう箒がかえす。

「では、いつてくるか」

零治はそう言うとピットゲートを出て行った。

第12話（後書き）

ISのラウラがVTシステムで暴走するときに

「力が欲しいか」ていう台詞が

プロジェクトアームズのジャバウォックの

「力が欲しいか」という台詞とかぶるの自分だけだろうかと思うところ

そして次はとうとう戦闘シーンだ！

なので頑張ります。

よろしく願います。

第13話（前書き）

今回は短いです

第13話

第13話

零治がピットゲートをでていくと同時に反対側からセシリアがでてきた。

「あら、あなたも逃げずに来ましたのね」
と腕を組みながら喋るセシリア。

「まあな。それより連戦でいいのか？負けたときに続けて戦ったからと言いつては困るからな」

そうセシリアを軽く挑発する。

「お気遣いはいりませんわ。代表候補生である、わたくしはあなた男性が二人、三人とかかかってきたところでわたくしは負けませんので」

「そうか」

零治は短く答えると試合開始のブザーがなる。すると真っ先にセシリアがスターライトmk？を零治に撃ったが零治はそれを難なく回避する。そしてセシリアもまた狙いを定めて何度も撃ってくるが零治には掠りもせずにいる。

「どうした、代表候補生とはそんなものか？」

と余裕の表情で回避しながら言う。

「あら、あなたはさつきから避けてばかりですけど反撃はされないのかしら。それとも避けるのが大変で反撃できないのかしら」
そう挑発をして返すが、セシリアは相手がいくら回避に専念しているとはいえ自身の射撃が一度も当たらないのには少しイライラして

いた。すると零治はやつと反撃にでた。

まずは左手に アサルトライフル、04 - MARVEをだしセシリアに対して撃つ。しかしセシリアも伊達に代表候補を名乗っているわけではなく、零治の射撃を回避していく。だが得意げに回避すると突如弾丸が直撃し、ひるむ。セシリアは零治の方をみると零治の右手にはレールガンRG01 - PIONEが握られておりセシリアが体制を立て直そうとしている間にも零治の射撃は襲ってきてシールドエネルギーが削られていく。

「どうした、いいのだぞ。お前」

「くっ！」

セシリアが苦い表情をする。だがセシリアもただ撃たれるだけではなくなんとか体制を持ち直すと

「あなたのことを少し侮っていましたわ。ここから本気でいかせてもらいますわ！」

そう言うときセシリアはブルー・ティアーズのビット兵器を四つ出すと、それが零治にむけて攻撃してくる。

「さあ、わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で踊りなさい！」

しかし零治は先ほどと変わらず余裕の表情で避けていく。そして何回か避けていくと

（…やはりな）

と何かに気づいた様子である。

「あら、また避けてばかりですか。さっきのように攻撃はしてきませんか？ さあ、あなたにはこのブルー・ティアーズを攻略することができまして？」

そうセシリアが言うと

「バカバカしい」

と呆れる零治

「なんですって？」

「貴様の弱点はズいぶんとわかりやすい。故に俺から見たら貴様

は只の的だ。まと相手に攻略も何も無いだろう」

そう言い嘲笑う。

「なら、わたくしに勝ってみせまして！」

そう言い再びブルー・ティアーズを差し向けるセシリア。すると左手の武器をレーザーライフルER-0705に変えてビット兵器を撃ち落し右手のRG01-PITONEでセシリアに当てていく零治

「貴様はビット兵器を使うとき制御に意識を集中していてそれ以外の攻撃が出来ない。しかもさっきより動きが鈍っているぞ」

「……！」

セシリアは自身の弱点を的確に指摘され少し苦い顔をする。そしてさらにビットを撃ち落していく零治。ビットを全部破壊してセシリアに突っ込む。するとセシリアがニヤリと笑う。

「——かかりましたわ」

そう言うときスカート状のアーマーの突起が外れて動く。

「おおいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

するとミサイルが発射され零治に襲い掛かり爆発する。

「どうです？あなたが的だと言って侮った結果でしてよ」

そう勝ち誇ったように言うセシリア。

「いや、やはり只の的だ」

と煙の中から声がし、そして煙が晴れると、そこには……ほぼ無傷の零治がいた。周りには薄っすらと緑色の膜が一瞬見えて、消えた。

「終わりだ」

そう言うとき零治は両手のER-0705とRG01-PITONEをしまい、イグニッション・ブースト瞬間加速を使い両手のレーザーブレード07-MOONLIGHTで切り裂いた。するとセシリアのブルー・ティアーズのシールドエネルギーが0になり試合が終了した。

「お前は何のために戦う？お前の果たすべき貴族の務めとやらはなんだ、男を見下すことなのか？自分が果たすべき務めをもう一度見直し答えを見つけるべきだ。少なくとも俺はそう思う」

零治はそう言っているとピットゲートにいったん戻り次のオルカとの戦いに備える。

そして十五分後。

零治とオルカがアリーナの中央で向かいあっている

「お前と戦うのはラインアーク以来か」

そう懐かしそうにいう零治

「そうだな、あのときはあんたらの茶番につき合わされたただけだな」

と皮肉に返すオルカ

「じゃあ、今度は本気で戦うか」

そう言っ下へに降りる。オルカもその意図を理解したらしく下に降りる。

「PICなどはいじっておけQBを使ったら一瞬で壁に激突するぞ」

「わかってる」

と注意する零治に答えるオルカ。二人は自身のISの設定を少々いじっている。

「終わったか？」

「ああ、終わったよ」

オルカがそう言っちょうどよく試合開始の合図が鳴る。

すると最初に仕掛けたのはオルカである。

オルカのISストレイドが右手のアサルトライフルMR-R102と左手のマシンガンXMG-A030で撃ってくる。零治はそれをQBを使い避けライフル051ANNRとアサルトライフル063

ANARで応戦する。オルカもQBを使いながら零治に再び攻撃していく。

そして次第に二人の攻防は激しさを増し観客達の目を釘付けにする。

「す、すげえ…」

と大きく口をあけて驚いている一夏。

「ああ、どうやらオルコットのときは本気じゃなかったらしいな」と箒も隣で見ていると驚いている。

「やはりオルカさんも強いですね」

と、平然と言うリリウム

「はああ…すごいですね。三島さんとリンクスくんは」

山田先生もあの二人の動きにはとても驚いているようだった

「ああ、そうだな。この学園でトップレベルだろう」

（二人のあの動きはなんなんだ！？どちらも尋常じゃない）

と表面上は冷静に見せても内心ではかなり驚いている。

そしてそんなやり取りをしていると戦局が大きく動いた。今まで二人とも手で持っている武器で削りあっていたが、オルカが右背のグレネードGOTOを零治の一瞬をつき撃つ。すると零治は、直撃はしなかったもののダメージ大きく受けよろめいた。そこにオルカは零治に対して追撃をしに突っ込んでくる。零治はそれを好奇にして両背のレーザーのEC-O307ABを撃つ。するとオルカはとつさにQBで避けるが半分ほど当たってしまった。オルカはすぐさま体制を立て直し零治を見ると両手の武器で再び攻撃を再開する。そして零治も同じように両手の武器で攻撃を再開した。

「ふむ、今のでしとめる事ができたと思っただがな」

涼しい表情で言う零治

「誰がそう簡単にやられるか」

そして再び撃ち合ってから少しするとオルカのシールドエネルギーは0になり零治も残り二桁ギリギリのところで削り勝ったのだ。

「やっぱり、あんたは強いな」

「お前もな、そっちの弾丸があと一発でも貰ってたら負けてたのはこちらだ」

そう言い合つと二人ともピットへ帰還した。

（俺、あの2人と戦うんだよな。勝てるかな）

一夏は2人の戦いが終わるとそう思っていた。

そしてその後はオルカ対セシリアであり。勝敗はオルカの勝ちであり、勝負の途中オルカも零治と似たようなことをセシリアに言っていた。その後の一夏対オルカ、零治対一夏は両方とも一夏の負けでクラス代表決定戦が終わった。

セシリア side

セシリアはシャワーを浴びながら今日のことを思い返していた。

織斑一夏、セシリアは自身が勝ったのに腑に落ちないでいた。セシリアは思う。その原因はきっと彼の目だろうと、他のものに媚びない目であった。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった…）

セシリアの記憶には自身の父親が弱々しい態度でいたことを思い出す。そしてISが発表されてからはそれが更に著しくなったセシリアの父親。それとはまったく逆の目をしていた一夏。いや、一夏だ

けではなくほかの二人もそうだったと思うセシリア。

そして他の二人を思い出すと「何のために戦う？自身が果たさなければいけない貴族の務めは何か？」その問いかけが蘇ってくるセシリア。

（自身が果たすべき貴族の務め…）

そう思うとセシリアは母親を思い出す。セシリアの母親は女尊男卑の前からいくつもの会社を経営し、成功を収めていった人だった。厳しかったが、憧れの人だった。だがもういない。三年前の大規模な事故で両親が二人とも他界してしまう。そして残されたのは莫大な遺産。それを金の亡者から守るために必死に努力をした。そしてやっとの思いで国家代表候補生に選ばれ両親の遺産を守ることができた。だがいつからだろうか、自身は相手のことをよく知らずに自分の勝手な思い込みによって格下だと決めつけていくようになったのは。セシリアはもう一度、自分の憧れていた母親を思い出す。すると自身の母親は相手を一方的に見下してなどいなかったことを思い出す。

（母は、相手の評価できるところはちゃんと認めていました。なのに、今のわたくしは…）

そう思うとセシリアは、今まで自身がしてきたことは自身が憧れていた母の背中とは全く違うことに気づく。

（今までのわたくしは空っぽのままでしたのね）

そうセシリアはわかると

（きつと今からでも遅くはないはずですわ。見付けてみせます。わたくしの答えを）

そう決意するのであった。

side out

翌日、朝のSHR

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

と嬉しそうに喋る山田先生

「先生、質問です」と一夏が聞く

「はい、織斑くん」

「俺は昨日全敗したのですが、なんでクラス代表に？全勝した零治がなるんじゃないんですか？」

「それは――」

と山田先生が説明しようとする

「それは、俺が辞退したからだ」

そう言う零治

「俺は、一応あくまでも社長というものになっていて、いつ緊急の呼び出しが来るかわからんからな」と、続けていった。

「因みに、俺はISの男性操縦者というのが発覚したのが遅かったためにIS学園に入れることを優先して企業からちゃんとしたバックアップをうけてないからな、それにくらべ一夏は倉持研究所からうけているから一番データを取りやすくなっているだろ、だからだ」そう言うオルカ

「じゃあオルコットさんじゃ駄目なのか？」

と聞く一夏

「いえ、わたくしも辞退させていただきましたわ。理由は実力が全てなどと安直すぎる考えではいけないと思ひまして辞退させていただきましたわ。なので一夏さんよろしく願いますわ」そう言う

「では、クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

千冬がそう言い、織斑一夏がクラス代表に決定された。

第13話（後書き）

相変わらず戦闘描写が下手くそですいません（汗
本当に難しいなあ…

そついやA C f aでアルテリアカーパス襲撃のブリーフィングで
てくるノブリスってレオハルトの時のアセンというのを今更気づい
た自分

第14話（前書き）

とりあえず次回はきつとみんな大好き酢豚ちゃんが登場します。

そして今回も駄文で申し訳ないです。

第14話

第14話

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、三嶋、リンクス、オルコット。試しに飛んでみせろ」
千冬がそう言うで一夏以外の三人はすぐに展開するが一夏は展開ができずにいた。

「早くしろ。他の三人は展開し終わってるぞ。熟練した操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

一夏はそう千冬にせかされると右腕を突き出し集中して心の中で

（来い、白式）

と呟くと展開に成功した。すると千冬から飛べと指示が出る。四人はそれを聞くと急上昇するが一夏だけはまだ慣れて無い様で上昇速度は三人よりも遅かった。すると千冬から

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

とお叱りの言葉をつける一夏。するとオルカが

「一夏、イメージは所詮イメージだ。やりやすいようにやればいい」

そうアドバイスをする。

「そう言われても、大体空を飛ぶ感覚が上手くつかめないんだよ。だいたいなんで浮いてるんだこれ？」

一夏のその言葉に対して零治が

「半重力力翼と流動波干涉の話になるがそれでもいいなら説明してやるぞ」

ニヤリと笑いそう言うのに対して一夏はすぐさま「いやいい、俺の頭ではは理解できない」そう断る。

そのやり取りをみてセシリアは微笑むと一夏は

「どうした、なんか楽しいことでもあったのか？」
とセシリアに尋ねた。

「いえ、とても仲がいいのですねと思いまして」

「そうか？今のはなんか遊ばれてた気がするけど」

そう答えてガクツと肩を落とす一夏。

「そういえば一夏さんは零治さんやオルカさんと放課後訓練していらつしやるのですよね？」

とふいにセシリアが聞いてくる。

「ああ、そうだけど。どうしてだ？」

「もしよければ、わたくしも御一緒にしたいと思います」

「いや俺も零治達も大丈夫だろうけどいいのか、そっちの練習のを遅らせたりしないか？」

「いえ、それは大丈夫ですわ。あの戦いの後、代表候補と驕っていた自分が馬鹿らしく思えまして、一から改めることにしましたのです。でももしよければと思いまして」

そう言うとその会話を聞いていた零治とオルカが「いいんじゃないか」とすぐに言ってきた。

そしてそんなやりとりをしてるといきなり

「一夏！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

と篤が山田先生からインカムを奪い怒鳴っている。そして千冬が指示を出す。

「四人とも地表から十センチのところに急降下と完全停止をやってみろ」

それを聞く四人。

「では、零治さん、オルカさん、一夏さん。お先に」

そう言いセシリアは地上に向かう。それを見て零治も

「では、俺も先に行かせてもらおう」

と言い指示を完璧にこなす。その2人を見て一夏は

「二人ともすごいな」

と感心している。そしてオルカも

「じゃあ次、俺行くわ。一夏、地面に激突するなよ」

そう言い残しオルカも指示通りに十センチのところに止まる。

そして一夏も同じようにやろうとする。するとものすごい衝撃音と共に地面に突っ込んでいた。

「馬鹿者。地面に激突しろとは誰も言っていないぞ。しかもグラウンドに穴を開けてどうする」

千冬が呆れたように言う。すると箒が

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えただろう。大体だな一夏、お前と言うやつは昔から」

そう腕を組みながら言っている

「やっぱり激突しやがったな。で、大丈夫か？頭とかに怪我は…ああ、頭は手遅れだったな」

オルカがやれやれといった感じでそう言う「手遅れじゃねえよ！」と返している一夏。

「…ISを装備していて怪我をするはずないだろう…」

と自分が一夏に話しかけているのをさえぎられて機嫌がよくないのか少しとげとげしく言う。

「篠ノ之さん、例え怪我をしなくても衝撃を完璧には消せませんのよ」

箒の発言に対してそう言うセシリア。すると箒は黙ってしまう。

そして一夏が立ち直ると千冬が

「四人とも武装を展開しろ」

そう言うつまり一夏が展開する。

「遅い、0.5秒で出せるようにしろ」

と厳しいことを言われ次にセシリア

「さすが代表候補生。だがそのポーズは横に向かって撃つ気か？正面に展開できるようにしろ」

これもまた厳しい評価をだされ、セシリアは返事をする。そして零治とオルカはほぼ同時に出す。

「ふむ、特に言うことはない」

と及第点を貰う。

「三嶋、リンクス、オルコット。近接用装備を展開しろ」

そう言われると零治とオルカは両腕についているレーザーブレードをしまい零治は射突ブレードもといとつきのKIKUを装備し、オルカもとつきのMUDANを装備する。だがセシリアだけはなかなか出せずにいる

「まだか？」と千冬にせかされる。するとセシリアは

「インターセプター！」

とほぼヤケクソ気味に叫び武器を呼び出す。

「…何秒かかっている。だから三嶋やリンクスに近接武器でやられるんだ」

と注意されガクツと肩を落とし落ち込んでいるセシリアであった。すると授業終了のチャイムが鳴る

「今日の授業はここまでだ。織斑ブランドを片付けておけよ」

と言うと授業が終わる。すると一夏が零治とオルカのほうを捨てられた子犬のような目で助けを求めてくる。すると零治とオルカは一夏のほうを向き親指をグツと立てると更衣室の方にむかって歩き出していた。

そして夕食後の自由時間

「織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「「「「おめでとう」！」「」「」」

クラッカーが鳴りクラスメイトたちが盛り上がっている。

そんななか零治やオルカ、リリウムの三人は騒ぎの中心ではないところで飲み物を口にして喋っている。するとセシリアが近づいてくる。

「あら、シエリーさんたちはあの中に入られないのですか？」

と聞いてくるセシリア

「私は賑やかなのは好きですが、あれはなんと言うかちょっと」

そう言い、零治も

「いや、騒がしいのは嫌いじゃないが流石にあれほどになるとちよつとな」

と苦笑いしながら返しオルカも

「右に同じ」

と返すのであった。

「それはさておきまして、前のクラス代表戦のときに言われたことなんです、まだ自分がどのようにすべきかなどと決められてませんの」

そう言い話をきりだすセシリア。

「いいんじゃないかそんなに急がなくても、まだ若いんだ時間はある」

と零治は言った。

「ふふ、そのように言ってくれると思っていましたわ。ですのでわたくしは自信をもって言える答えをきつと見つけてみせますわ」セシリアは自信満々にそう宣言する。

「そうか、せいぜい頑張れ」

とオルカは短く返すがどこか期待しているような感じに言う

「では、いつか聞かせてもらえる日まで楽しみに待たしてもらおう」

そう零治は微笑みながら言う。そんなやりとりをしていると

「はいはい、新聞部二年の黛薫子です。話題の男子三名に特

別インタビューをしに来ました〜！」

と女子がやってきてまず一夏にインタビューする。

「クラス代表になった感想を、どうぞ！」

そう言いながらボイスレコーダーを一夏に向ける黛薫子。

「えーと…まあ、なんとというか、頑張ります」

「えー。もつといいコメントを言つてよ」

「自分不器用ですから」

「うわ、前時代的！まあ適当に捏造させてもらつよ」

と堂々と捏造発言をして次にオルカに対してコメントを貰いに行つた。

「はい、男子二人目リンクスくん！いろいろ謎に包まれていて知りたいけど、今はなんでもいいんです是非一言コメントを！」

「じゃあ、俺に挑むやつはマツハで蜂の巣にしてやんよ」

「いい！そういうの待つてたんだよ！」

と言いはしやぎながらメモしていく黛薫子。そして次に零治に対してボイスレコーダーを向ける

「男子三人目の三嶋くん！レイレナード社の社長でもあり男性操縦者！社長としてのコメントを貰いたいけどそれはまた今度にさせてもらつよ。今は学園の生徒、一個人としてのコメントをちょうだい！」

「ふむ…では、誰であろうと、俺を越えることなど不可能だ。はどうだろうか」

「いいね！そういうのしびれる！じゃあ最後にセシリアちゃんも」

「そうですね、わたくしの名にかけまして頑張らせていただきますわ」

「うーん、かっこいいんだけどパンチが効いてないというか…そうだ！織斑くんに惚れたからでいいよね」

「なっ、違います一夏さんには惚れてませんわ！」

「そつか、一夏くんには惚れてないんだ」

と意味ありげに言う黛薫子。

「じゃあ、とりあえず四人とも並んでね。写真撮るから」

そう言い一夏、零治、セシリア、オルカの順に並ぶ

「あ、あの撮った写真はいただけますわよね？」

と聞くセシリア

「そりゃもちろん四人ともあげるから心配しないでね。それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと…」

一夏が困惑していると零治とオルカが

「74・375」

そう答えると「せいかい」と返ってきてデジカメのシャッターが切られる。しかし写真にはいつの間にか他の生徒が大量に入り込んでいた。そしてリリウムはちゃっかり一夏と零治の間に入り零治の腕を掴み勝ち誇ったような顔をしている。

「いつのまにはいったんだリリウム？」

零治はあの一瞬でよくはいれたなと感心している

「さあ、いつでしょう？」

と微笑みながら言うリリウム

そして周りは男子の中に一人だけ写るセシリアに

「抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

などと女子がキャッキャッ騒いでいる。

そしてこの騒ぎは夜の十時過ぎまで続き幕を閉じた。

第14話（後書き）

最近、A C f aでアステリズムを使ってみたがジュリアスはよくあんなに上手く動けるよなと関心します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

IS 何回か転生(?)する人の物語

2011年12月5日20時49分発行